

論 説

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変(時計廻りの移行)」(1)

理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論

夏 剛

1. 金字塔型の経済・文化格差と政治支配の構造

「文革」の後期に毛沢東が唱えた「3個世界」論では、米・ソ2超大国の「第1世界」と先進国・中進国の「第2世界」に対して、中国は「第3世界」の途上国と分類された。ソ連の解体に因り元の「第1世界」は成り立たなく成ったが、中国は「第3世界」の1員としての自己規定を変えていない。21世紀の中葉なかばに国民生活が中進国の水準に達すると言う目標は、先進国・中進国・途上国の3階層構図の上に立つ。一方、朱首相の智囊ブレインと目される経済学者・胡鞍鋼センター(中国科学院+清華大学国情研究中心主任〔首席〕・清華大学教授)は、『地域と発展：西部開発新戦略』(2001年)の中で、経済力に拠る国内の「4つの世界」の区分を提起した。

其の「第1世界」は上海・北京・深圳経済特別区等の高所得発達地域で、直近の1人当り域内総生産が世界の所得上位中級クラスの国・地域よりも高い；「第2世界」は天津・広東・浙江・江蘇・福建・遼寧等の大・中都市、沿海の所得上位中級クラス地域で、同数値が世界の下位中級クラスより高く上位中級クラスには及ばぬ；「第3世界」は沿海地域の内の河北・東北・華北中部の一部を含む所得下位中級クラス地域で、同数値が世界の下位中級の平均を下回り世界の第100～139位の間に位置する；「第4世界」は中・西部の貧困地域・少数民族地域・農村・辺境地域等の低所得地域で、同数値が世界の第140位以下の水準と成る。全人口に占める4地域群の比率は、其々2%強、22%弱、26%と約半分である¹⁾。

此の分析は大陸のみで台湾は含まれないが、上記指標が世界の上位に入る台湾の現状を考えても、海峡兩岸の合体の困難さは好く解る。「1国2制度」に由る祖国統一を促す大陸は1981年の提案の中で、台湾省が財政難に陥った場合は中央政府は援助するとの餌を撒いたが、無知と指摘された²⁾のは仕方が無い。政治・外交・軍事等の総合的な国力に頼る大陸と、大陸時代の蓄財を底力とした経済が強みを成す台湾は、其々「力」と「利」に重みが置かれ優位が在る。

台湾の地位の安泰が示唆する「利=力」(経済力即実力)の等式は、生産力の向上を国家の至上命題や指導者に対する究極の評価基準とした鄧小平の持論³⁾の根底にも有ろう。

香港の中国返還後は香港の大陸化よりも大陸の香港化が起きるとの観測が有り、其が半ば現実に成りつつある事は、「人往高处走」(人は高き処に行く)と同じ理屈だ。大陸と台湾の拮抗は経済格差に因る処が大きいが、同様に縮み難い大陸内部の貧富の差は民衆や地方・少数民族の離反を招きかねない。99年に発足した国家的な工程^{プロジェクト}「大西部開発」は、此の火種が一^{いず}刻も放置できぬ極限状況の結果であるが、毛・鄧時代の西部開発支援は何れも高揚が長続きしなかった。理想主義の気炎が盛んで政治的な統制が厳しい毛沢東時代の末期にも、「天南海北我都去，就是不去新西蘭」(天[津]・南[京]・[上]海・北[京]の何れにも行くが、新[疆]・西[蔵]・蘭[州]だけは御免だ)と言う戯れ詞^{ことば}が若者の間に流行っていた。

「天南海北」は元より中国全土を指し、「新西蘭」(Newzlandの意識+音訳)は地理的に世界の中の「辺遠地区」(中央から遠く離れた辺境地帯)の観が有るから、第2世界(先進国)のニュージーランドと第3世界(途上国)の中国との落差と結び付け、地球の反対側の彼の島国の特産羊毛が新疆・内蒙古と通じ合う事を思い浮かべれば、実に辛辣な妙味を持つ皮肉と言える。広義の「大西北」は面積が国土の約半分を占めるにも関わらず、人口の比率が僅か5%程度に止まる状況が百年も変わるまい⁴⁾事は、「貧弱=遠心力・不安定要素」「富強=求心力・安定装置」の原理を裏付けている。

高所得地域の加速度的な成長に因り国内の2極化は益々拡大し、世界の先進国と途上国の場合よりも歩み寄り難い、と言う悲観的な展望は現実味を増す一方である。国家統治の重荷と成る此の断層は、政治文化に於ける不均衡の問題にも繋がる。即ち、人口の相当数を占める貧困地域・貧困層からは、国家指導者は殆ど出ていない⁵⁾。偉大な人物・偉大な国家・偉大な機会を偉大な指導者の条件とした元米大統領・ニクソンの命題⁶⁾を用いれば、「窮則思変」(窮乏すれば変革を考える)の革命原理との不整合は説明し易いが、別の矛盾も派生して来る。

「第1世界」と「第4世界」の人口や所得水準の巨大な開きは、中国の社会・地域の金字塔^{ピラミッド}型構造を浮き彫りにしている。同じ古代の世界4大文明の結晶として万里の長城と並ぶ埃及の金字塔^{ピラミッド}は、縦社会に於ける頂点の強力な支配、及び天と底の絶望的な隔たりを象徴し、途上国の砂漠の真っ只中に聳え立つ形象^{イメージ}も加わって、老大国・中国の基礎的な条件や統治の構図の絶好な見立てに成るが、対^{つい}の観念を以て更に掘り下げれば、頂上の両雄(深圳は上海と共に北京に無い証券取引所を有しながらも、政治力や規模^{スケール}の点で雄^{ゆう}を称えるには程遠い)の間の高次な相異も気に掛かる。

天安門事件の際の知識人が自任した「精英」(英才の精粹)は俗に「尖子」と言うが、「小」が「大」を凌ぐ「尖」の字形は件の金字塔^{ピラミッド}構造の表徴としても妙味が有る。頂点に在る北京と上海は人口比が其々1%程であるが、局地ながら片方が政治の最高峰、片方が経済の選手権者^{チャンピオン}

という性質に因り、太極図の「陰陽魚」の両目めく全国の焦点を成す。「画龍点睛」の寓話に因んで言えば、「巨龍」の片目に当る北京こそが、偉大な環境や機会に最も恵まれている処なのに、辛亥革命以降の約1世紀以来、北京出身の国家指導者は不思議にも皆無に近い。

毛沢東時代から人材・資金等が全国から北京へ吸い上げられ、上海と北京の出版社・新聞社数が逆転した結果⁷⁾が示す様に、文化の尖端も結局は政治の中心に敵^{かな}うまい。にも関わらず北京が国家指導者を生み出さずにいる事は、政治と経済・文化・精神風土等との乖離を示唆する。意味深長な事に、毛は中共指導者に多大な影響力を持つ『辞海』の改訂という国家的な文化事業を上海の専門家集団に委ね⁸⁾、鄧は権力の中心に遠く離れた上海から江沢民、朱鎔基を其々自分の後継者、周恩来の膝元で育った李鵬首相の後任に起用した。

天安門事件後の鄧は指導部の中の武力鎮圧の功臣を昇進させぬばかりか、楊尚昆（国家主席・党中央軍事委員会第1〔筆頭〕副主席）・楊白冰（中央軍委秘書長・軍総政治部主任）兄弟の実権を取り上げた。逆に、上海で『世界経済導報』を停刊させ急進的な知識人に鉄槌を下しつつ武力行使を拒んだ江、上海市民向けのテレビ演説で北京の武力鎮圧に態度を保留した朱に軍配を上げた。同じ四川出身で親交の深い楊尚昆を自ら切ったのは一見、自ら決断した武力鎮圧を否定する不条理、地縁-「人縁」(人脉) 社会の伝統に背く不人情の様だが、「力治」志向の後退の表徴 指導部頂点からの西南出身者の消失は、次世代の脱意識形態・非軍事的な治國を望む鄧の一種の禪譲とも言えなくない。

「此一時也、彼一時也」や「彼亦一是非、此亦一是非」に照らせば、其の「順天応人」(天意に従い民意に応じる)の有為転変として納得が行くが、孫文も賛同した『易経』の此の4字格言⁹⁾は此の1件に於いて、時代の要請に応え人材の実状に合わせた選択とも合致する。「1国2制度」を唱えた鄧は権力譲渡に於いても「双軌」(複線)を見せたが、茅台酒の酒精含量^{アルコール}の2本化も似た時流の変化の表現^{あらわれ}に成る。赤軍の長征の途中で周恩来が偶然に口にした事が契機で共産党時代に言わば「国酒」の声価を得た茅台は、海外市場の需要や国内消費者の嗜好の国際基準との「接轨」(軌道の接続。規格・基準同一化の譬え)に随って、従来の53度を維持する一方43、38度物も創出された¹⁰⁾。

其の濃烈・淡麗の同居は伝統と時流の共生と解釈できるが、南部亜熱帯の貴州や四川の酒の強烈さは料理の「南淡北濃」と併せて、国内「文化溝」^{カルチャー・ギャップ}の超克・融合の先天的な可能性を示す物だ。「北人南相・南人北相」の混血・相乗りを「理・礼」と「力・利」の論座に当て嵌め、「是亦彼也、彼亦是也」の複眼で観れば、対立の末の統一が又も見えて来る。鄧が経済成長を政治戦略の中核に位置付け、政治的な野心の薄い江が天安門事件で漁夫の利を得た事は、北京の『論語』の中に「算盤」が包まれ、上海の「算盤」の中に『論語』が含まれる仕組みを立証した。

2. 孔子の「庶 富 教」と共産党中国の4世代指導者の「^{とけいまわり}順時針」移行

改めて『論語』の中の「算盤」を点検すると、正統な礼教が取れて光を当てなかった次の語録が目につく。「子適衛，冉有僕。子曰：“庶矣哉！”冉有曰：“既庶矣，又何加焉？”曰：“富之。”曰：“既富矣，又何加焉？”曰：“教之。”（孔子が衛に行った時、冉有が馬車を御した。孔子が「（此の国は）人口が多いね」と言うと、冉有は「人口が十分に多い場合は、何をすべきでしょう」と訊ねた。孔子が「富ます」と答えると、冉有は「富裕に成った場合は、何をすべきでしょう」と訊ねた。孔子は「教育する」と答えた。）¹⁾

此は個人の損得とは次元が異なる国家の『論語』+「算盤」の話と言えるが、荀子の「先義後利」と対照的な「先富後教」論は、「聖人」・教育家の孔子の精神重視の固定^{イメージ}形象とずれた様でありながら、中共が信奉するマルクスの唯物主義とも合う常識的な原理なのだ。管子の「凡治国之道，必先富民」（凡そ治国の道は、必ず先ず民を富ますのだ）²⁾、「倉廩実則知礼節，衣食足則知荣辱」（倉廩が実れば即ち礼節を知り、衣食足りれば即ち荣辱を知る）³⁾を思い起こせば、実務志向に富んだ儒教の本来の姿は再び確認し得る。

漢字が示す概念で思考する習性を華人の特質とした竹内実の命題を発展させるなら、中国の歩みも漢籍の道筋に沿う処が多いと思える。反「孔教」の新文化運動の潮流から生まれた中共¹⁴⁾も、建国後の半世紀に於いて謀らざるも孔子の青写真通りの展開を見せた。「人口衆多」を最大な資本に強盛志向を貫く毛沢東時代¹⁵⁾ 数の力より生産力・生活水準の向上を目指す鄧小平時代 貧困から脱出した後に精神の豊かさを追求する江沢民時代、という変遷は正に「庶矣」「富之」「教之」の3段階である。

一部の人や地域が先に豊かに成る事を奨励する鄧の「先富」政策は、期待通り他の人や地域への波及効果を以て国全体の発展を促したが、孔子の「先富後教」も同工異曲の「先富」論と見て能い。鄧は自ら舵を取る改革・開放に於いて、78年末に政治から経済への「工作重点轉移」に踏み切った後、80年に「社会主義精神文明建設」を打ち出し、86年に運動^{キャンペーン}で此を推進したが、此も一種の「先富後教」に当る。其の戦略の実現の為 80年に首相に起用された趙紫陽は、奇しくも^{くだり}件の衛国の都 河南省滑県の生まれである。

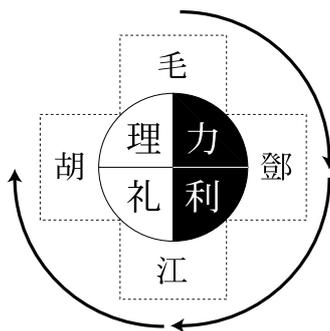
人口が多い程1人当りの国富が稀薄化し、豊かに成れば道德低下の可能性も高まる。大所帯や富裕の其の落とし穴に対する孔子の洞察は、共産党中国の道程でも証明された。河南の一隅に在った衛国が比べられぬ規模の老大国に於いて、「庶」「富」「教」の2段飛びを一気に敢行したのは、大変な偉業と言わざるを得ない。物心2面の理想の高さや現実との乖離の大きさ、2兎をほぼ同時に追わねば行けぬ故の2刀流に因って、様々な混乱、混沌、動揺、自家撞着が起きたが、轉換期特有の止揚や渦巻きと受け止めれば当然な事である。

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」(1)（夏）

大鉦^{おおなた}を揮う荒業が強い方向転換は、短期間で大幅に修正しないと決定的に転落^{しま}してう様な状況^{ゆえん}の所以だ。末期も含む毛沢東時代の隠れた「礼・利」¹⁶⁾の反面、「理・力」の肥大が著しい傾斜を招いた事実も否めない。其の時代の「革命+強大」の理想は複眼に見えつつ、霸道の一極に尽きようとも思われる。其と対蹠を成す江沢民時代の「徳治」は逆に、単眼的な観も有りつつ実力の増強・行使の含みを持つ。霸道から王道へ転化する途上の「儒商」は、礼義の保障たる富裕の実現を目指す「富・教」志向の複合として必然性を持つ。

毛沢東時代の意識形態^{イデオロギー}+軍事独裁は「理+力」の組み合わせの様に見えるが、4要諦の概念図¹⁷⁾では上陽・上陰の2元に当て嵌まる。俱に上部に在る「理」の高邁・光明と「力」の高圧・暗黒は、白地と黒地で表わす陽・陰の2極を成す。人口の数を資本とし実力の増強や利益の獲得を図った毛沢東時代は、内実に於いて「力・利」に偏る側面も有った。4要諦図の右側の此の2項は左側の「理・礼」と乖離し、立派な建前と対極に在る意味では陰の部類に入る。其の時代の壮麗・明朗の外観の裏の陰湿・混沌は、巡り巡って此の2者の黒地+白抜き^{イメージ}の形象に合う。

第9回党大会の「主席台」（離壇）で毛の左側に坐った「文革」派は後に失脚し、右側の実務派・老元帥集団の系統は鄧小平時代の治国の主宰と成った¹⁸⁾。英語のleftの「左」「急進的」「弱い。無価値」（古英語の意）とrightの「右」「正しい」「権利」の多義は、其の左・右の2翼の特質に妙に符合するが、「文革」後の変革は「左半脳」の「理・礼」から「右半脳」の「力・利」への「重点転移」に見える。共産党中国の歴史と将来像を4要諦図に即して考えれば、4極の間を価値順位が「順時針」（時計廻り）方向に沿って回転・流動する軌跡・指向性に気付く。



4要諦を軸とする4世代指導者「順時針（時計廻り）」移行の概念図

毛の時代では建前は「理+礼」で、裏に「力+利」の側面も有り、2つの対の間の「理+力」が本質と思え、対蹠の「礼+利」の結合は著しく欠けていた。其の重心は「理+礼」「理+力」「力+利」の3つの対の加重平均 「理」と「力」の中間に当り、頂点の中央なる位置は「太陽」・毛の垂直支配に似合う。

鄧の時代では上代の「理+力」は継承され、裏だった「力+利」は建前に近い重みを持ち、「儒商」が象徴する「礼+利」の結合が新たな特徴と成り、逆に毛の時代の建前 「理+礼」は少し欠けていた。其の重心は3つの対の加重平均 「力」と「利」の中間に当り、右寄りの中庸の位置は象徴的である。

江の時代では「理+力」の軸は意識形態や軍事独裁の稀薄化に伴って後退し、「利+礼」の軸に立脚しつつ、「力+利」の軸から「徳治」が象徴する「理+礼」の軸へ重心を移して行く。3つの対の加重平均 「利」と「礼」の間に位置する重心は、指導者の低姿勢や社会の泥臭さに相応しい。

此の3世代の指導部の重心と成った複合次元に跨がる連結の線は、毛の時代の□ 鄧の時代の□ 江の時代の□ という変遷を見せる。天が地を蓋う□と地に足が着く□は、同じ縦軸で凸型と凹型の対を成す。毛沢東時代の27年の激震・多難と逆に、其の半分の13年半に亘った江沢民時代は高成長・多幸が目立ったが、対蹠に在りながら基軸を共有する点は、中国思想の対立・統一原理に符合する。領袖の権威を樹立すべく躍起に成った江の健気さは、弱体の自信不足に因る神格化の強迫観念が薄かった毛¹⁹⁾の裏返しと思える。

毛は「文革」で「自下而上」の造反を煽てたが、下から突き上げる大衆運動に対する彼のコントロールは、逆の「自上而下」(上から下ろす。トップ・ダウン)である。上山春平は日本の凹型文化の理論的根拠を道教の逆説から見付けたが、其の女陰の見立て 谷の窪み・穢れの故の生産・増殖の可能性²⁰⁾は、江の「虚懐若谷」(虚心坦懐、谷の如し)の一面にも見られる。一方、「谷」の字の上部の空へ向い天を衝く形は、ボトル・アップ故の下剋上の野望を漂わせるが、其の上昇願望と背伸びと対照的に、鄧小平は名前通り水平軸に腰を据えていた。

鄧は天安門事件後の国際社会での孤立化を凌ぐ為に16字方針を決め、中の「韜光養晦、決不当頭」(韜晦・雌伏に徹し、決して頭に成らぬ)は、権力の頂点を極めた前後の彼及び胡錦濤の共通点と言える。最高位の獲得に関する2人の淡白さは実務志向にも因るが、2人の指向性と個性の濃淡は上記の図式の通り対極を成す。鄧小平時代の右に立って左へ向う□は、資本主義を導入しつつ社会主義の堅持に力点を置く姿勢の表徴に見え、胡錦濤時代の左に立って右へ向う□は、社会主義の旗を掲げつつ「グローバル」経済を進める路線に符合する。

4世代の指導者の奇数組と偶数組の対立・統一は、90度ずつの「順時針」の右廻りの正転回を経て、慣性を以て連続の円環の完成へ向かっている観が有る。作為的で恣意に描いた図式と思われようが、正 反 合の弁証法、漢文の起承転結、漢詩の平仄抑揚、漢語の4声調、漢字

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」(1)（夏）

の「方塊」（方形の塊）構造，中国人好みの左右対称，陰陽原理の四方・四季の循環，在庫循環を示す「在庫時計」「景気時計」²¹⁾を思い浮かべれば，律儀な秩序有る展開は意外と多い。経済法則を治世の梃子とした管子も，陰陽の相剋相生を万物の発展の摂理と捉えた²²⁾。

3. 「波浪式前進・螺旋形上昇」と4要諦・4段階の内なる変容

「無産階級専政（独裁）」を謳歌した毛の「力治」 市場経済原理を駆使した鄧の「利治」 伝統の再生産力を活用した江の「礼治」の延長線に，次世代の「理治」の指向性が見えて来る。4諦図の下の「礼+利」に当る「儒商」は，礼教の成熟の故の謙遜や中共が信奉する唯物主義の土台 下部構造への重視に合致するが，時計廻りの次の区間 「礼+理」は他ならぬ哲学的な意味の上部構造だ。一方，上方の「理+力」は王道と覇道の複合を持つ「自上而下」^{トップダウン}の高圧性が有る。天安門事件より先に建国後初の戒厳令が敷かれた西藏^{チベット}の「暴乱平定」を指揮した胡錦濤が次世代の頭^{かしら}に選ばれた事には，2巡目の循環の最初の「理+力」の複合の複線が敷かれている。

今次党大会は建党81周年の後に開催されたが，此ほど総決算と新出発に似合う節目は珍しい。横・縦各9個で並ぶ天安門の装飾用のお碗状の大きな釘が象徴する様に，1桁の最大の数の9の2乗 81は神秘的な極致の意を持つ。『西遊記』の中の經典貴いの為の印度への旅は，江沢民の執政期間とほぼ同じ14年近く（5048日）の間の，81回に亘る受難と10万8千里^{のほ}に上る道程を経て漸く成し遂げたが，其の試練は戦争中の「万里長征」と「社会主義新長征」にも通じる。清王朝が香港を99年の租借期間で英国に譲渡したのは，2桁の枠内でギリギリ収めようという苦心の他，「久久」（長久）との同音も一因と言われたが，直近の返還は81に含まれる「九九歸一」^{チョウチョウゴイ}の法則の体現とも言える。

「九九訣」（九九）の「九九八十一」（ $9 \times 9 = 81$ ）も，略して「九九歸一」と言う。2千数百年以上の歴史を有す此の掛け算の要訣は，春秋時代では「九九八十一」が冒頭に出た²³⁾が，今は「一一得一」（ 1×1 は1）で始まる。基礎的な算段から終点へ導く運びは，『西遊記』の「西天取経」（西天へ經典を取りに行く）物語の過程重視と通じ，結果を「得」と表わす処は結果・利得重視の傾向を反映するが，中国の「九九」は時間の次元でも玄妙な数^{すう}を成す。1つは夏至と冬至からの9日×9の区切りで，今や冬を指す場合が多い。第3，4節の「三九・四九」（1月中旬前後）は嚴寒の代名詞とも成り，81日後の3月中旬の陽春は熟語で「九九艷陽天」（九九[明け]の麗かな春の日）^{うらら}と言う。

もう1つは旧暦9月9日の重陽節であるが，此も西暦とは別の時間体系を浮き彫りにする。毛は1929年の『采桑子・重陽』で，毎年の此の節句と共に老いて行く人生の寂寥，及び自然・革命の永遠を詠んだ。西暦10月に書いた此の詞^{うた}の複雑な心境は，秋の開催が多い昨今の党大会

に於ける世代交替と重なれば興味深い。一方、毛と彼の時代の二重時間と「天寿」を表わして、彼が指揮した中共軍草創期の「秋收起義」(秋の収穫期の蜂起)は、27年の西暦9月9日の事である²⁴。「陽数」(奇数)の9の限りを尽くした様に、其の「陽寿」(天寿)は49年後の同じ日に終わった。仏教で忌引きの重要な節目と成る49は、1桁の「陽数」で2番目に大きい7の2乗だが、9月9日は夏至の6月22日からの「夏九九」の終点に近い。

孔子・孟子の没年に由来した中国人の厄年 73, 84歳は、晩年の毛に気を揉ませる不吉の暗示と成った²⁵。民衆から「万寿無疆」(長寿無限)の祈願が捧げられた彼は83歳未満(数え歳84)で逝り、国際共産主義運動の長年の旗手・ソ共が築き上げた超大国も74年の歴史に幕を閉じた。第2の「鬼門」に差し掛かった目下の中共も、物理的な高齢や命運の限界を憂慮する時期に在ろう。第1回党大会の13人の出席者は全国の53名の黨員を代表したが、建国53年後の黨員総数(6千6百万人)は其の125万倍にも膨らんだから、歴史・規模とも老大国(和製漢語の「老大家」を擬った筆者の造語)・中国の「老大家」と言える。

「老大」(長兄)と自任し「兄弟党」に威張ったソ共に毛は反撥したが、「蘇東波」(「蘇東坡」の語呂合わせで、蘇連・東欧[社会陣営崩壊]の衝撃波を言う1昔前の流行語)の後には、頭数が英・仏・伊の人口(其々6千万弱)に匹敵する世界最大の政党として、中共は否応無く西側に対抗する勢力の先頭に立たざるを得ない。今大会開幕日の11月8日が露西亞革命85周年の翌日であった事は、別に意図が無かったとしても象徴性を感じさせる。今後も西暦の最後の桁が2, 7の年の開催なら、後3回目は其の人類史上初の社会主義革命の百周年での開催と成る。70歳定年の直前まで胡總書記が2期務める場合は、次世代領袖が誕生する10年後の大会は中華民国建国百周年に当る。

変易に満ちた歴史は恰度百年で周期的な変動が起きるほど律儀ではないが、西暦の世紀と同じ長さで天寿の上限と見られる此の3桁の時間単位は、巨視的な回顧や展望には便宜的で有効な視圏に成る。社会主義革命や近代国家建設も超長期の歩みを見詰め直す事に由り、見失った方向性や衰えた志気を取り戻せる。但し、原点を振り返り初心を温めるのは復旧や退嬰を意味しない。毛はレーニン流の「波浪式の前進、螺旋形の上昇」で革命や歴史の紆余曲折を形容したが、横軸に沿う起伏も縦軸を巡る旋回も、同じ軸の延長線で過去の軌跡と距離を置いた合致が有り得ても、元の地点に戻る様な完全の吻合は不可能である。

『紅樓夢』の人物は貴族権力者の大家族の衰微後も表面的な繁栄を保てる貫禄を、「百足之虫、死而不僵」(百本足の虫[馬陸・蜈蚣]は、死んでも僵れない)と形容した²⁶。毛も引いた事の有る此の熟語は、「瘦死的駱駝比馬大」(瘦せて死んだ駱駝は馬よりでかい。腐っても鯛)と通じる。旧ソ連解体後の露西亞では今も諜報幹部出身の大統領が恐怖政治の流れを汲んでおり、封建王朝崩壊後の中国では最近まで皇帝型専制が残り続けて来たのは、頑固な慣習が引き摺った結果である。党が「知天命之年」(50歳)を迎える前に毛が新陳代謝を促したのも、肥大化や

「僵化」（硬直化）に迫られた自己更新であり、「百足虫」の壊死の足の切断や移植、再生である。

江の「法治・徳治」と国民党への脱皮は、毛の「封建的な社会主義」の独裁政治と訣別し、前現代（「前近代」に因んだ筆者の造語。post - modernの「後現代」の対概念。政治的には第1次世界大戦・露西亜革命～^{ロシア}ベトナム戦争・中国「文革」終結の約60年間を指す）の世界と中国の共産主義運動の偏狭を修正する動きだ。「文革」中の毛は党の刷新を二酸化炭素の吐き出しと新鮮な血液の注入に譬えた²⁷⁾が、其の「吐故納新」は部分継承・部分更新の累進作業である。体躯が維持した儘で体内の変化に由り生命が営まれて行く過程とも通じて、歴史の進化・展開は時間・空間・人間・観念の要素の添加に伴う転化の連続なのだ。

「人生易老天難老，歳々重陽。今又重陽，戦地黄花分外香。」（人の生は^{ひと}老い易く^{いのち}天老い難し、^{としとし}歳々に^{まきのせつく}重陽のめぐりきて。今又も^{まきのせつく}重陽，^{まきのせつく}戦地の^{まきのせつく}黄花の^{まきのせつく}分外香るんな^{ことほかがお}な²⁸⁾。）毛の『重陽』の前半の此の詠嘆は、初唐の劉廷芝の「年々歳々花相似，歳々年々人不同」（年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず）が下敷きに有った。孟浩然の「人事有代謝，往来成古今」（人事代謝有り、往来古今を成す）と結び付けて、今秋の人事刷新から古今の「人」（指導者や体制）と「花」（指導原理）の変遷を見渡すと、「理・礼・力・利」4要諦、此等を用いる統治という「天」の変容・不易の重層・漸進・累進性が目に付く。

例えば、「理治」の「理」は（0）旧中国（封建社会と半封建・半植民地的な国民党時代）の統治者を代弁する「天理」（1）毛沢東時代の革命の原理・理想（2）鄧小平時代の科学的な合理精神（3）江沢民時代の民主・科学精神の一層の発揚；「礼治」の「礼」は（0）封建的な礼教（1）共産主義倫理道德（2）社会主義精神文明（3）弘揚中国伝統文化；「力治」の「力」は（0）独裁統治（1）軍事力を盾とする実力（2）生産力+軍事力の総合的国力（3）総合的国力+精神力；「利治」の「利」は（0）寡占経済や買弁経済（1）計画（国家管理）経済（2）経済中心路線・市場経済原理（3）実恵（実益）重視・利欲肯定、という止揚・昇華の軌跡を呈している。

封建社会 買弁資本主義・民族資本主義が盛んな半封建・半植民地 資本主義を排除した「封建的な社会主義」 外国資本を導入した「社会主義の初級段階」 資本家入党の許可を含め資本主義的な要素を更に認めた「全民小康社会」、という展開は相剋相生の性質の他に、超克された旧い方が新しい方の土台や肥料を成し、「旧」の養分を吸収した「新」が部分的な回帰の形も含めて母胎を改良して行くのも特徴だ。江沢民時代の「法治・徳治」は、「王法・宗法」の忠孝思想と儒教の倫理主義を保留した毛沢東時代の法家的な家長制+革命的な道德律を経て、鄧小平時代に芽生えた現代的な法精神や「精神文明」を発展させた物だ。

4. 「理治・治理」の反転一体と「理治×利治」「力治×礼治」の交錯・相乗

「徳治」が封建時代の用語を踏まえた事は、「理」の「王+里」の字形に通じて王道の奥義と言える（中国語の「里」は「内」の意）。江が唱えた清廉や全民富裕の志向は、朱鎔基の異名・「経済皇帝」の原型 雍正帝の「正大光明」、『礼記』を踏襲した孫文の「天下為公」（天下を公のものと為す）、毛沢東の「为人民服务」（人民に奉仕する）²⁹⁾の延長だ。毛は封建時代の階級抑制・不平等に対して、階級差別（支配階級の労・農の被支配階級の地主・資本家に対する抑圧、中間階級の知識人・商人に対する優位）を保つ一方、官民の平等を謳い所得平準化を謀った。労・農と学・商の地位が接近した鄧の時代の機会の平等と結果の不平等を経て、資本家も社会の主人となり得る江の時代の機会と結果の相対的な平等を目指すに至ったが、原始的な大同理想を基にした毛の素朴な平等の始原的な貢献も否めない。

天安門事件の前に著名知識人が政治犯の釈放を求めて鄧に書簡を送り、5.4運動70周年、建国40周年と仏大革命2百周年の節目を出しに、民主・自由・平等・博愛の実現を促した³⁰⁾。彼の西欧資本主義革命の発祥地の滞在中に入党した鄧に対する揶揄も有ったろうが、欧米より各方面で大幅に遅れているのは中国の実情だし、実事求是の現状認識と発奮志向の結果、「最後のエンペラー」³¹⁾の退場後に変革が一気に進展したのも否めない。政治的な規制を行ないつつ競争原理で経済を活性化する鄧の「鳥籠統治」の結果、江の時代では言論管制の緩和や政治処遇の「仁慈化」等、自由・博愛の雰囲気が高まったが、其の素地は毛や孫文、乃至昔の諸子百家の一部の平等観念にまで遡及できる。

「法輪功」を邪教として容赦無く取り締まった江は、中国の精神風土に合った仏教を肯定していると言う³²⁾。対敵闘争での「心慈手軟」（心優しく手緩い。慈悲・軟弱）を否定する毛も、実生活に寄与する仏を祀る農民の現金主義に共感した³³⁾。独裁政治・武力鎮圧への反動として生まれた博愛精神は、実は無慈悲な「虎気」の持ち主と自認した毛にも内蔵されていた。「夢里依稀慈母淚，城頭變幻大王旗。」（夢里依稀たり慈母の淚，城頭に變幻す大王の旗。）³⁴⁾ 魯迅は乱世の中の心の支えを斯く吐露したが、「慈母・大王」は対立・統一の対であり得る。城頭の旗が再度変わった後の指導者 毛・周は、共に孝行を忠実に実践し堂々と提唱した³⁵⁾。

毛は人民に奉仕する「全心全意」（全身全霊）を要求し、林彪等「文革」派は「靈魂深处私心一閃念」（精神の奥底の一瞬の私心の閃き）を戒めたが、中共指導者の複雑系には心底の「一心多念」も有る。伝統觀念の影響は父母への孝行に因んで言えば、其の「孝・母」と同音の「酵母」に見立てられるが、「酉」の「酒」と「醒」に跨がる重層性も滋味が深い。冷静な理性の「清醒」、清楚な味の「清淡」への選好を映す茅台酒の「淡化」は、痩せの貧相を無くすべく豊満の「富態」（「貧相」の反対語。貫禄）を目指し、実現後に「減肥」（瘦身）を始める変容と

重なるが、其の貧弱 豊饒 洗練の流れは「庶 富 教」に合致する。

「毛沢東思想」の概念を発明した王稼祥³⁶⁾の夫人・朱仲麗は、初代駐ソ大使の夫と共に赴任した後、フルシチョフから華奢さを誉められた。中国では地主の女房だけが肥^{ふと}っているのかと訊かれた時に、金持ちは美食に恵まれ好く眠れるから当然肥るのだと答えた³⁷⁾。前現代的な価値観を映す其の見方は今や時代遅れの嫌いが有り、功を焦る事を戒める比喻の「一口吃不成胖子」（一口食べただけでは肥るまい）も聞こえ無く成った。象徴的な事に、毛の「紅焼肉」（豚肉の醤油煮込み）に対する拘りや劉伯承元帥の「肥肉」（^{あぶらみ こうにく}脂身・膏肉）飽食に見立てた貪欲³⁸⁾と対照的に、周恩来と同じく故郷の料理の代表格に「紅焼獅子頭」（醤油煮込みの肉団子）が有る江沢民は、肉は余り食べず周や蒋介石と同様に粥を好むらしい³⁹⁾。

広義な肉の枠内で「肥肉」と対蹠に在る嗜好の象徴として、粥と共に食べる肉松（肉のでんぷ。干した肉の細かくした物）が思い浮かぶ。長時間炒めた末に肉の形も油も消し切って出来た肉松は、乾き切った枯淡さと糸状の繊細さ、粥並みの柔軟さを併せ持つ物だ。指導者の味覚の個人差も「肥肉」好みの四川 湖南 山東 東北ラインの後退を印象付けるが、肉を価値の尺度や享樂の目標とした孔子や梁山泊好漢の影が薄れた時流も感じる。一方、江は最近外賓との会見で「一口吃不成胖子」の代わりに、「一鍬挖不出一口井」（一回鍬を入れただけで井戸は掘れられぬ。大きな仕事は一気に完遂し得ぬ事の譬え）の諺を使った。毛沢東時代から愛用されて来た謝恩の格言 「吃水不忘掘井人」（水を飲む時は井戸を掘ってくれた人を忘れぬ）と共に、飽食への追求よりも基本的な飲水の課題が浮き彫りに成る。

毛沢東・江沢民・胡錦濤の名が俱に「水」偏を内包した事は、常に旱魃に悩まされ飢渴精神^{ハングリー}の強い国柄らしい姓名選好を映し出す。鄧・江の時代に跨がった首相・李鵬と同じ水利発電が専門で、黄河上流の建設現場で長年働いた胡の総書記就任は、水利資源と工業化・情報化の社会基盤^{インフラ}が乏しい西部の開発に取り組む国家戦略にも合うが、黄河の「治理」（制御・管理）を君主の治国能力の試金石とした古の常識^{いにしえ}⁴⁰⁾から観ても頷ける。日本人は此の頃 governance の合い言葉を導入し⁴¹⁾つつ、「統治」の語感への拒否反応も有って中性・無色の片仮名で表記しがちだが、中国流の瀟洒な訳し方の「治理」^{スマート}⁴²⁾は此の文脈と事例にぴったりである。

今次党大会開幕の2日前に長江三峡ダム工事の堰止めは、党内序列第2位の全人代委員長・李鵬の花道と成った。第8回党大会の前に毛が詞で詠んだ三峡ダム建設の構想⁴³⁾は、住民の強制遷移や自然環境・文化遺産の毀損等の弊害に因り反対が強かったが、近代化建設の糧なる電力の供給不足を解消し、国・民の財産・生命を洪水から守る事の優先順位を考えれば、合理的な「両害之中取其輕」（2つの害の中から軽い方を取る）⁴⁴⁾と言えよう。4世代指導者の隔世遺伝めく継承・展開と連動する様に、温家宝が李鵬の次の次の首相の最有力候補として期待を集めた材料は、副総理就任直後の98年夏、長江流域と東北嫩江・松花江流域の百年来の大洪水（被災者数約1.2億、死者3千人余り）の際に、国家防汛抗旱総指揮部総指揮（水害干害対策

本部長)を兼任し陣頭指揮に当たった事だ。

専攻の地質畑で現場経験と学術論文の業績に富んだ彼は、自らの専門知識と政治的な決断力を以て、武漢防衛の為の或る堤防の人工決壊を止めさせ多くの損失を回避できた。干支の1大巡り前の38年に蒋介石は日本軍の攻勢を阻止すべく、河南の湯恩伯部隊に鄭州附近の黄河大堤防を爆破させたが、回天の奇跡が起きず絶大な犠牲(被災者約1,250万人、内死亡・不明者90万弱)で遺恨を招いた。建国半世紀来の比類の無い此の快挙は、其の愚挙に比べるまでもなく、新世紀に相応しい新型の指導者と統治法の誕生の兆しと思える。民を犠牲にした蒋の軍事目的の洪水造成と対照的に、平和目的の洪水制御に於いて軍が文民統制(中国流では「文官掌〔官〕軍〔文官が軍を掌管する〕」の下で防災の主力として活躍した。軍事演習の恫喝を除く軍事力の行使が無い事も、江の時代と先代の違いである。

洪水征服で揮った温の手腕も今大会で誕生した新指導部の陣営も、「3達徳」の標準的な順位「智・仁・勇」に合致する。儒教が唱えた此の3つの普遍的な徳目は、「智・勇・仁」「仁・智・勇」「仁・勇・智」「勇・智・仁」「勇・仁・智」等の組み合わせも有り得る。様々な変型や長い曲折を経て再び原型に戻ったのは、1回りの完結へ向かう4諦図の「重点転移」とも通じる。量的な変化が質的な変化を起す法則に関する毛の論断への敷衍に成るが、「理治・力治・利治・礼治」4区間の質的な変化は、時間や結果の量的な累積に因り異質な質的な変化を招く。次の回転は枠組みを維持しつつも、4諦の変容や再編が予想される。

例えば、胡の専門と温の功績の接点と成る水利は、河川・国家の「治理」と併せて別の「利治」の可能性を示唆する。新政治局常務委員が全て理科の出身である事は、「理」の科学の利器の側面を浮上させる。中国現代史の起点 新文化運動の「民主・科学」志向⁴⁵⁾は、83年後の今次党大会の「政治文明」宣言と指導部の建設専門家集団化に因り、漸く前現代との徹底的な訣別に近付いたが、「民主治世 = 礼治 + 理治」「科学立国 = 力治 + 利治」の図式と共に、民主・科学とも「理」に収まる帰趨も強まった。胡錦涛時代の軸足が移った「理」の新意を起点に、「理治」と表裏一体の「治理」から新しい回転を始める公算が高い。

「理治」「治理」の裏返しはフィルムの反転の様であり、陰陽原理の対立・統一にも通じる。左・右2側が其々黒・白と成る「怪圈」(メビウスの環)の中でも、片方の黒の区間内を真直ぐに進むと、途中で環自体の反転に因り同じ側でありながら白の区間に入った^{しま}。胡錦涛時代に於ける「4諦図」の完結も単純に回帰を果たし循環を迎えるのではなく、4徳目の中身と枠組みの再構成に伴う物である。其の質的な変化は既に鄧小平時代から起きており、例えば「理」は意識形態の「^{イデオロギー}淡化」の結果、天理・道理・合理・倫理・「治理」へ変容し、「力」の域でも武力が表面から後退し生産力が頂点に上昇する反転が見られた。温家宝の洪水退治の快挙と名の寓意に即して言えば、決断・実行力や知力も此の次元で主な伝家の宝刀と成ろう。

其だけでなく、4諦の位置も新しい組み合わせが出来る。例えば、本来「礼・理」の範疇に

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」⁽¹⁾（夏）

跨がる「徳治」は、「徳・得」の同音も有って「利」により関わって行く。最近打ち出された党の3つの代表性　中国の先進的な生産力の発展の要求，中国の高度な文化の前進の方向，中国の最も広範な人民の根本的な利益は，鄧小平時代の「力+利」と江沢民時代の「利+礼」が重畳する「利・礼・力」の複合だが，「儒商・徳治」の両方が含む「礼」の次元に属する文化も，対極に在る武力への優位や生産力との結合に因り「力」の性質が増す。斯くして「理 力 利 礼」の順次展開の他，「理治×利治」や「礼治×力治」の襻状の相互参入や相乗も生じよう。

5．国・共の「鉄窓統治 鳥籠統治」の同根と中・台の「有序輪替」の同時・同方向

中国の歴史は対の発想を反映して，「春秋・戦国」「秦・漢」「唐・宋」「金・元」「明・清」等，対と成る時代や区分が多い。中華民国と中華人民共和国も一対と成り，後者の勢いが前者を上回っているのは前の諸対に合致する。左様な2分法は時代の内部にも有り，例えば「初唐・中唐・盛唐・晩唐」は対の2乗であり，最盛を記録した宋は更に北宋の盛と南宋の衰を含んでいる。此の2つの時代の事象間の対として，整然たる唐詩と不揃いの宋詞，其々豊満と瘦身を女性美とした唐と宋の観念が思い浮かぶ。共産党中国の歩みは唐 宋や北宋 南宋と反転の暗明に見え，「富態 減肥」の変化は逆に「肥唐 瘦宋」と重なる。

「有錢難買老来瘦」（金が有っても老来の瘦せは買えぬ）の養生訓で，豊饒 洗練の価値追求の帰趨は説明が付く。「台湾の魯迅」・柏楊は中国の伝統を「醬缸（漬物甕）文化」と名付け⁴⁶⁾，守旧性に対する其の批判は胡耀邦の共鳴を得て中共の保守派の反撥を招いた。大陸で「文革」の全面内戦が頂点に達した 68年，同じ一党独裁の孤島で彼の作家・評論家は，親子が小島を買って順番で大統領に成ったと言う漫画の説明を書いた事に因り，「国家元首侮辱罪」で12年の懲役に処された。85年に台湾で刊行した『醜陋的中国人』（醜い中国人）は翌年に大陸に上陸し，旋風を起こして間もなく鄧の思想管制の下で発禁と成ったが，一連の「台風」の爪跡は「政治文明」実現前の国・共2党の同根・「同步」（同時進行）性を窺わせる。其の善悪は別として，老大国の文化・歴史・哲学の超長期の蓄積は，練達の爛熟と腐敗の糜爛を同時に生み出す。

熟年を過ぎて枯淡の境地へ向かって行くのも，人間の身心の自然な法則である。絢爛たる極色彩から次第に老練・淡泊に変わった蘇軾の文学は，彼が考案した「東坡肉」（「文火」と醤油で煮込む骨・皮付き豚肉）の熟成とも通じるが，其の「五色絢爛」「漸老漸淡」（次第に老成し次第に枯淡に成る）⁴⁷⁾は肉松の本質に通じる。毛は死去の丸15年前の9月9日の詩で，栄光有る孤立の象徴として「勁松」（勁い松）を讃えた⁴⁸⁾が，植物の松の屈強・不拔と対照的に，「松」は形容詞として弛緩・余裕・脆弱・開放の様を表わす。其の意から名詞の「肉松」が生まれたのも漢語の妙だが，毛以後の中国の政治的な「寛松」（寛容・緩和）に対する社会の要望⁴⁹⁾や，当局の「外松内緊」（外には緩めの印象を与え内では引き締める）の統治法は，「肉松」と

「内松」の字形の近似も有って此の見立てと繋がる。

蔣経国は逝去の半年前の 87 年夏に万年戒嚴令を解き台湾の民主化を進め、其で先代の負の遺産の清算と遺産の運用主体の退場の複線が敷かれたが、ソ連留学時代の同窓・鄧は 2 年後建国来初の戒嚴令を西藏と北京で矢継ぎ早に発動した。東欧共産圏解体寸前の世界的な「寛松」に対する逆行の様だが、独裁開発途上の経過措置として必然性を持つ。首都戒嚴令発布の 5 月 20 日が台湾戒嚴実施開始の恰度 40 周年に当る事は、建国来の相対的な治安強固と今次の空前の危機、及び国・共 2 党の共通な宿命を浮き彫りにした。蒋介石政権と同工異曲の毛沢東時代後期の「鉄窓」(鉄格子の嵌まった窓。牢獄の表徴)統治が「鳥籠」統治⁵⁰⁾に取って代われ、其の鄧小平時代の「放+収」(開放+規制)の二刀流が屢々「緊」に傾き、「松」の失速への制御が時々窒息を惹き起こしたのは、先代の低成長・高緊張から高成長・高緊張へ移行したという背景及び指向で正当化できる。

89 年の「開殺戒」(殺人の戒律の打破)で保った安定に支えられ、開発は独裁の助力が要らぬ程まで進んで来た。江沢民時代の高成長・中緊張を経て、胡錦涛時代は中成長・中緊張が予想される。其の武力鎮圧後は大乱が消え、辺境の少数民族分裂運動や「死党」(死を恐れぬ徒党)の寡ない「邪教」、不意な天災が最大な内患へと上昇した状況は、天下大乱を起こした毛が夢見た「天下大治」⁵¹⁾が現実味を帯び始めた事を意味する。「治」の「彡+台」の字形と重なる台湾も、経済の頭打ちや大陸の脅威の強さと進攻の確率の低さに困り、成長・緊張とも「中」の小康状態に在る。類似の水準で展開する胡錦涛時代には、先発組との差は更に縮まろう。

其の延長で高成長・低緊張が実現できれば、毛の時代の低成長・高緊張と反転を成す最高の展開と言えよう。途上国 中進国 先進国の変貌が出来ると、今日の「発達世界」(先進国-地域)並みの中成長・低緊張 低成長・低緊張が最終の帰着に成りそう。共産党中国の初代の激動に因る高緊張は其の安定故の低緊張と対蹠に在り、通算ベースの低成長も発射台の高低や土俵の大小の差の為に、高位を保つ新時代の表面上の低成長とは同日に論じ得ぬ。不透明な新世紀に成長・緊張の度合いは増幅するだろうが、上記の方向性は人類社会の不易な成り行きであり、胡錦涛時代は新たな転回・展開の前奏曲と見てよい。

毛の秋收起義と他界の日付の 9・9 は、運命の「輪回」(巡回。巡り)の始まりとされた⁵²⁾。今次の総書記交替は香港の媒体で、「開啓了中共歴史上領導人有序輪替的先河」(中共史上の指導者の秩序有る交替の端緒を開いた)と讃えられた⁵³⁾。両者の接点の「輪」は動詞として「回る」「順番に従う」の意だが、同音の「倫」も輪に似た波紋状の分際の重層が原義⁵⁴⁾で、儒教の人倫・倫理の真髄は人の序列や事の次第に他ならぬ。「倫」の字形も人倫の含みを内包しているが、中華民族の聖山・昆仑の「崑」の概念を生む表徴性が此処で顕われる。「言」偏が付く「論」も「倫」と同音であり、「倫理」は「論理」(中国語では「道理を主張する」の意)の論拠と成る。

「水」偏が付く「淪」は、中国語の「輪回」が兼ねた「輪廻」の沈淪と繋がる。水は湯きを癒す事も溺死させる事も出来、船を載せる事も覆す事も出来る諸刃の剣だ。「倫」の字源の波紋も水の平穏が破れた攪乱と、順次広がって行く秩序の両面を持つ。私欲の存在の必然性を認めたと上で其の氾濫を制御する儒教の原理は、「倫」の原風景に凝縮された「放+収」並存の「烏籠統治」だ。「治」の「水」偏は水の清浄作用と共に、「輪流」（順次交替する）の字面・語義・発想の様に、「倫」の道筋も暗喩的に含めている。其の流動は孔子の「智者楽水」を連想させるが、中国語の「治・智」の同音・同声調も儒家の志向を映し出す。

「^{リージー}理治」の本質は「^{リージー}理智」との同音にも窺えるが、「^{ジーリー}治理」(zhili)の発音が「^{ジーリアオ}治療」(zhiliao)に内包される事も意味深だ。先賢の「上医医国」（上医は国を医す）の格言⁵⁵⁾の通り、「治」は医療行為でもある。「統治」の字面と重なる統括的な治療の意や、此の2字の「糸」偏と「水」偏は、中国医学の神髄に他ならない。江沢民が長男・次男に付けた「綿恒・綿康」の名も、姓の部首と共に「糸+水」の組み合わせを成す。「細水長流、吃穿不愁」（細い水が長く流れる[様に支出を抑えれば]、衣食の愁いは無し）は、正に「糸+水」に由る安康（安泰+小康[余裕]）を言う。2人の名が合成した「恒康」を「細水長流」の浸透で築くのが、中国医学の得意技である。

目下の中・日の合い言葉 「徳治」と「癒し」は合成すれば「治癒」に成り、両者の治療対象 精神は「恒」の「卜」偏（中国流で「豎心旁」）と通じる。治癒の「全治」の意は字面で「總統」と対を成すが、西洋医学の対症療法の局地的な即効性に対して、病根を抜本的に除く「治本」法は治世の極致であり得る。体内の停滞や悪循環を食い止め好循環を促す漢方医の「理順」（整理。理に由って整える）は、河川や社会の「治理」でも好く踏まれる手順なのだ。「順」の「川+頁」の字形は「輪流」交替に因る歴史の新たな頁の示現や、^{ページ}鄧に遡れる「有序輪替」の「先河」が出来た後の川上（四川・上代）川下（長江下流出身者・次世代）への権力譲渡の順調な実現に吻合する。

混乱・不条理を是正する使命から、「文革」後に「^{キーワード}治理・理順」が好く統治の鍵言葉に使われて来た。89年11月の第13期党中央第5回総会では、^{ページ}鄧の完全引退と江の軍委主席就任で世代交替は一応の区切りが付いた（「第2世代と第3世代の中央指導グループの引き継ぎ完了」の宣言は、建国45周年の94年国慶節の直前の14期4中全会の決議として、「4人組」逮捕18周年の同10月6日に公表された）が、新旧指導部の間の最重要な「交代」（引継ぎ）事項は、採択された『關於進一步治理整頓和深化改革的決定』（改革の一層の制御・整頓・深化に関する決議）の題に集約された。^{ページ}鄧の前年の『理順物価、加速改革』（物価を整理し、改革を加速する）⁵⁶⁾は、其の至上命題の中の其々手段・目的を表わす2組の4字成句と対応する。条理を以て整える意の「理順」は、「治理・整頓」の相関に合致する。

其の「理」は「治理」と重なり、「順」は「頓」と「頁」偏を共有する。「頁」は文・書を連

想させるが、「頓」と連用する「整」の構成要素 「女」は、「文」と似て非なる形から中国流で「反文旁」(逆「文」偏)と言ひ、鞭の含みも有る。「整」の「束+女+正」の字形は、鞭を使う「管束」(管理・拘束)で正す意を隠し持つ⁵⁷⁾。「管束」は日本語で「維管束」の略でしか無い⁵⁸⁾が、其の繊細な植物組織の意味・形象と対照的に、中国語では強力な支配を表わす動詞が基本的な用法である。蒋介石が西安事変の「領袖監禁」を咎めて張学良を軟禁に処した際も、軍事委員会に引渡し厳重な「管束」を加えよとの文言を使った。

6. 先代・先々代の「人治」から今・次世代の「仁治」への脱皮

懲役10年赦免の但し書きの「交軍事委員会厳加管束」で、張は「鳥籠」生活を半世紀余り強いられた。自由剥奪の期間が恩赦刑期の数倍にも及んだのは余りにも理不尽だが、其の「此恨綿々無絶期」(此の恨み綿々として絶ゆる期無し)に因んで、白居易の『長恨歌』の「連理枝」(連理の枝)は国・共の「1樹2枝」をも形容できよう。張の名誉回復は蒋家父子の目の黒い内には遂に実現できなかつたが、「鳥籠」が次第に「寛松」に成り李登輝時代の暁に漸く取り除かれた⁵⁹⁾。台湾の民主化に逆行する形で、同じ頃の趙紫陽は総書記解任後に党籍保留の寛大措置を受けつつ、「鳥籠」に入れられ江体制任期満了の今日に至った。趙の故郷・河南で獄死した劉少奇よりまじるとは言え、超法規的な処置の不条理は否めない。

劉の幽閉・他界の地・開封で生まれた柏楊が劉の党籍剥奪と同年に、運命を共にする^{つもり}心算で随いて台湾に渡った国民党政権に由って投獄された事は、国・共双方の初代本格政権の誤謬を端的に現わした。曾て毛は或る実務的な定例会議への出席を要請されなかつた事に立腹し、党規約と憲法を持ち出して発言権を主張し劉を叱つたが、「文革」中の劉が憲法を依拠に国家主席の儘での自由喪失に抗議しても無駄だった⁶⁰⁾。共に憲法を武器に用いた処は「理」の建前としての至高の地位の証であるが、憲法も暴力^{あかし}に対して無力であった結果は、其の時代の「力治」の優位を裏付けている。お前を小指1本で潰せるぞという「文革」前の毛が劉に発した暴言⁶¹⁾は、2人の巨頭の力関係と職位の軽重を考えれば一面の真理も感じる。

毛が国家主席を途中で劉に委ねた事に因る2主席並立の体制は、古来の「天無2日、国無2主」の原理に反した故に劉の破滅を招いた、という観方は一理が有る。江の党総書記・国家主席・軍委主席の兼任は、其の教訓を汲んだ「内耗」(内部の摩擦に因る消耗)防止の役割が評価できる。其は措て置き、毛・劉の対立は厳密に言うなら、党中央主席兼軍委主席 vs 国家主席の2主席対1主席なのだ。個人の声望・力量の以前の問題として、国に対する党・軍の優位だけで勝負は最初から付いた。大陸政権末期の蒋介石が総統を李宗仁に代理させた後、下野先で党・政・軍を自在に動かした一幕にも、似た構図が見られる。

毛はニクソンとの会見で「我々の共通の旧友の蒋委員長」と言った⁶²⁾が、其の肩書きは国民

政府軍事委員会委員長なのだ。党総裁や「中華民国総統」よりも「委員長」の馴染み度が高いのは、蔣・毛2人の軍事独裁体制の実情に合う。張学良の最終処分が軍事委員会の「管束」であった事は、「党纪・国法」の拘束をも超越した其の機関の権勢を窺わせる。桂（広西）系軍閥・李宗仁が到底蔣に敵わなかった原因は、極言すれば軍委の長に成り得なかった弱さに尽きる。周恩来がニクソンに紹介した通り、毛の時代では国・共2党は「匪」と呼び合ったが、政権を生み出した鉄砲に対する双方の最重要視は寸分も違わなかった。

大陸時代の最後の正・副総統就任式で、蔣は2の李宗仁に軍服の着用を指示した一方、自分は民族衣装の「長袍馬褂」（長衣に詰め襟の羽織）の姿で登場した。李は蔣の護衛の様に映り屈辱を感じた⁶³が、「武」に軸足を置き尚「文」に建前上の優位を与える統治文化は、蔣の時代に継承されたわけである。対照的に、毛は紅衛兵大集会に臨む直前に軍服の着用を思い付き⁶⁴、林彪事件までの数年間は「副統帥」と同じ軍服姿が多かった。周恩来まで付き合った軍服姿は「時装」（ファッション）並みの憧れを集め、軍人は特に優遇される事も有って人気一番の進路と成ったが、一連の風潮は「力治」の重点を映し出す。

張学良に対する国民党政府軍事委員会の無期「厳管」と台湾の長期戒厳は、蒋介石の宿敵・毛の時代にも「変相」（形を変える変種）の形で有った。建国時に敷かれ「文革」中再び猛威を揮った軍事管制は、戒厳令無き戒厳と言って能い。行政・治安当局の省政府・警備司令部が発布した台湾戒厳令に対して、共産党政権の軍事管制の主体は党中央軍委管轄下の軍隊に他ならなかった。「文革」中地方政府に代った「革命委員会」の長に大体「軍区」（広域部隊）首長が据わったのも、「軍管」に因る「軍・官」複合である。整頓の「頓」の「屯」や駐屯の「駐」の「馬+主」の字形は、駐屯地に対する軍の主導には妙に符合する。毛の後継者・華国鋒が首相代理 首相 党首兼軍委主席に昇格後も公安相を兼任した（77年3月まで）事も、軍事 警察国家の実態を端的に物語っている。

江沢民時代にも続いた「外松内緊」は、張学良に対する蔣氏父子の軟禁や毛沢東時代の隠れた戒厳体制の延長とも思える。鄧小平時代末期の物価騒乱・政治動乱は、国家の意志や武力の封殺で維持された表面的な物価安定・秩序安泰の破綻という側面を持つ。「文革」前の中共は世界革命の好機に対する期待を込めて、国際社会の「大動蕩（激動）・大分化・大改組」を指摘したが、其の激震・変易は初代指導部にも当て嵌まる。「紅太陽」・毛の不落と大黒柱・周の不動は、「通期運用」の安定感の錯覚を誘いがちだが、其の後の激変の大衆化・表面化には、「絶対権威」の自壊と「力治」の自粛に因る「厳管」の箍の緩みが大きい。

鄧は軍を盾に政争に挑み軍に由る粛清（天安門広場の「清場」〔清掃。滞留者を退場させる整理〕）を敢行し、軍政治部機関紙・『解放軍報』を使って「資産階級自由化」を攻撃した⁶⁵が、林彪事件後に軍閥割拠の危険を指摘し、毛が許可した8大軍区司令官の相互異動⁶⁶に由る軍の制御を其の後も進め、軍・政の分断を成し遂げた。其の結果、『解放軍報』は「文革」中の「天

声」を伝える「2報1刊」(2紙1誌)の一角の重みを失い、党中央や政治局に於ける軍人の比率は「文革」中の異常な高水準が引き下げられた。彼が江沢民を支える為に軍委第1副主席、軍委秘書長兼総政治部主任に据えた楊尚昆・白氷が、新体制の基盤が固まった途端に失職したのは、其の集大成の総仕上げと見られる。

江沢民への国家主席の譲渡は1人への集権に見えるが、軍に影響力を持つ長老から文官への「平和過渡」(平和的過渡・移行)とも言える。斯くして裏読みは負・暗から正・明を見出す事も儘有るが、完全引退後の隠然たる力で「楊家将」を下ろしたのは、年功に物を言わせる「余太君」の裁断⁶⁷⁾の様でありながら、統治は結果が全てなので其の人治的な政治も正しい「仁治」と成り得る。軍委主席の権限は鄧の党・国を凌ぐ超法規性を助長したが、其の椅子の主^{ぬし}が彼でなければ、百万人の軍縮も出来なかつたろう。「文革」後の国防予算通増の恒常化は域外の懸念を引き起こしたが、軍の肥大化の抑制に繋がる兵員の削減は拡張の脅威と相殺し得る。

軍事力より経済性を優先する転換を政治力に頼って断行した大「裁軍」(軍縮)は、鄧の真骨頂を窺わせ毛の流儀の特質を浮き彫りにした。「2報1刊」で『人民日報』に次ぐ『紅旗』『解放軍報』は、鄧の時代に前者は改刊させられ後者は軍内向けの本来の姿に戻された。解体や分離の対象と成った其の党の理論誌と軍の機関紙は、正に先代の「理治+力治」の象徴である。鄧の「力治+利治」は其と一部重なる様だが、毛と鄧の二刀流の要は其々「力」と「利」に在った。2本立ての基軸の重心も「順時針」^{とけいまわり}の移行をしたわけだが、「理」を以て「力」を通す毛の統治から脱出し、鄧は「利」を以て「力」を建設的な方向へ誘導した。

中共指導者が愛用して来た「因勢利導」(情勢に応じて有利に導く。勢いに従って理想的な方向に導く。有利な情勢を巧みに利用する)は、出典の『史記・孫子列伝』と語義が示す様に「力・利」の結合である。鄧の「力治+利治」は此の格言に因んで言えば、「以利導勢」(利を以て勢いや情勢を有利に導く)の特徴が鮮明だった。「勢」の「執+力」と簡略字の「勢」の「扌(手)+丸+力」の字形は、其の実力・武力の行使と抑制の両面の表徴たり得る。毛の「有理・有利・有節」(道理が有り、有利に成り、節度を持つ)も孫子流の智慧だが、「理・利・礼」を跨ぐ此の対敵闘争の要訣は他ならぬ「力」の勝利を目指すのだ。

70歳を過ぎた毛が黄河考察の為に騎馬の特訓を受けた事⁶⁸⁾は、「馬上打天下」(馬に騎って天下を取る)の熟語に即して考えると、人海戦術に頼る経済建設と同じ軍事家の本質を印象付ける。戦時体制の下で一挙に共産主義に突入しようとした「軍事共産主義」の志向は、4諦図の「上半球」に似合う高圧と「浮躁」(軽率・焦燥)を見せた。対して鄧の経済専念の「初級社会主義」は、政権奪取後の維持に譬える「坐天下」(天下を睨み鎮座する)の通り、足が地に着き腰が据わった姿勢である。「力治」の共通項を持ちつつも毛の対外的な覇権を唱えぬ軍国志向の土台を徐々に崩したのが、鄧の1歩後退、2歩前進の結果だ。

7. 台湾海峡兩岸の「同軌・同倫」

天安門事件の転換点には、趙紫陽がゴルバチョフ書記長との会談で鄧の院政を暴露し、「皇帝」打倒の声を誘発した事が有る。歴史的な中ソ和解の儀式が5月16日に行なわれたのは、13年前の同じ日の党中央通達に由る「文革」の点火を意識した設定に見えるが、翌年の同じ日に台湾各地の大学生が台北の蒋介石記念堂前の広場で座り込み、「万年代表」の鎮座で塞がっている「国民大会」の解散、『反乱鎮定動員時期臨時条項』の廃止、政治改革促進の為の国是会議の招集を要求した。19日に一部の参加者が断食に突入し、翌日に請願の座り込みが高雄に波及したが、此は奇しくも曾ての台湾・北京戒嚴令の発布日と吻合する。

其の1年の時差や一連の暗合で浮上した双方の相関は、更に大陸と台湾の4世代指導者の交代の類似に気付かせる。蒋介石の他界の翌年に毛沢東・周恩来が逝去し、蔣経国の死去の翌年に鄧小平が完全引退し、李登輝の「総統」退任の翌々に江沢民が総書記を禅譲した。民進党政権の誕生で国・共の相克・共生の構図が崩れたが、共産党中国と似通う「^{とけいまわり}順時針」移行は海峡の対岸にも見られた。陳水扁の「総統」就任演説から「国父」・孫文の名が出なかった事と、胡錦濤時代の暁に党規約から『共産党宣言』の文言が消えた事とは、「党易国存」と「党国俱存」の違いが有りながら、初代と大きく乖離した変容は似通わなくもない。

台湾の学生運動は断食当日の政府の譲歩で平和裏に収まり、鎮圧に対する海外の憂慮は杞憂に終わった。天安門事件との比較は政府と学生への侮辱だと当局は言い放ったが、民意を変革の外圧に利用する李登輝の魂胆を思えば、若者の^{うぶ}初心さが政争の具にされた北京の例との類似も感じる。学生の退散は識者の指摘の通り、台湾の一定の成熟を示した賢明な選択と言える⁶⁹⁾が、「物極必反」(物事が極端に達すると必ず反転する)の法則の通り、未熟を無残に露呈した大陸も急速に成熟へ向かった。台湾の民主化も世代交替と同じ大陸より1歩早い⁷⁰⁾が、鄧の長寿と対照的な蒋家父子の「先生先死」⁷⁰⁾は先行の負の面を思わせる。

台湾の経済成長と政治改革の「^{リード}領先」(先行)の要因は、「天時・地利・人和」の多面に渉る。進攻され難い孤島と米国の支持という天然・人工の「屏障」(屏風の様な障壁)、及び大陸時代の含み益の「老本」(旧い資本)が先ず目に付く。垂細垂の雁行型成長の先頭を飛んだ「頭竜・騰竜」⁷¹⁾の日本や、次発の台湾・香港・^{シンガポール}新嘉坡も、孤島が「孤城」(孤立した都市)⁷²⁾である。同じ「4小龍」の韓国は半島の一部だが、米国の保護下に置かれる処が台湾と一緒だ。老子の「小国寡民」の理想には程遠いが、統治し易い規模の利点は看過できない。逆に、「庶富教」の大変さは人口の多い大陸の後発の必然性に数えられる。

徒手空拳の一般人に対する中共軍の武力鎮圧は、「殺鶏用牛刀」と見られても仕方が無いが、民の寡ない小国の「鶏犬之声相聞，民至老死不相往来」(鶏犬の声相聞こゆるも，民は老死に至

るまで相往来せず)とは異次元の話だから、過剰な反応は蓋然性も持つ。其を暴挙として糾弾した台湾当局も僅か5年前に、軍情報局と極道に由る『蒋経国伝』の著者・江南の暗殺で、鶏を殺すのに牛を割く刀を用いる愚行を演じたばかりだ。毛沢東時代では55年に文学者・胡風が投獄されたが、作家の処刑は無かった⁷³⁾し、江南暗殺の84年頃には言論統制は命を脅かす物ではなかったので、五十歩百歩の双方の優劣は常に入れ替るわけだ。

国・共間の「匪」云々の罵り合いが休戦した後、94年の台湾観光団惨殺事件で大陸は李登輝に「土匪」(匪賊)と貶された⁷⁴⁾。余りの蛮行で言い返し難い大陸の泣き処は、開化度に於ける台湾の一日の長を思わせた。但し、同じ世紀の前半に目を転じれば、国民党政権が東南の一隅に固まった起因は、そもそも悪政で民心を失い大陸から敗退した事だ。中共政権の信認危機を招いた失政は大陸の為政者の宿命かも知れぬが、遅行ながら変革を断行したのも兩岸政権の同根性の現われた。李登輝は「儒教圏繁栄論」に就いて植民地経験を「4頭の龍」の共通点に挙げた⁷⁵⁾が、共産党中国も「文革」や天安門事件後の孤立で党・国滅亡、「地球籍」(国際社会構成員の資格)喪失の危機を覚えた。儒教の上昇志向と内外の圧迫が奮起を促した結果は、江南の居住先・米国からの圧力が促した蒋経国の心機一転と一緒だ。

大陸に不都合な観点の所為で00年秋に香港の媒体から追われた中国観察家・林和正は、『新皇帝・胡錦濤の正体 中国第4世代指導者の素顔と野心』の最後に、蒋経国とゴルバチョフの様な民主化断行の期待を胡に掛けた⁷⁶⁾。終章の題・『ゴルバチョフかプーチンか』で、独裁政治と訣別した一方ソ連の解体とソ共の弱体化を招いた開明派と、新世紀に国力を回復すべく鉄腕を揮う新独裁者との対が考えさせられた。2人を其々極端な理想主義者と現実主義者と捉えるなら、共産党中国の4世代指導者の「順時針」移行は此の座標で、理想主義 現実主義 現実的な理想主義 理想を目指す現実主義という軌跡を現わそう。

胡は未知数なので予断できないが、前の3代とも域外の3人とも異なるはずだ。ゴルバチョフに該当する人物は寧ろ、「新権威」を以て民主化を仕掛けた趙紫陽⁷⁷⁾かも知れない。「因勢利導」の手腕の欠如にも帰せられる失敗も2人の共通点だが、林彪・「4人組」等の「身敗名裂」(身〔地位〕が滅び名が廢れる)に因んで言えば、趙の「身廢名存」とゴ氏の「身退名廢」は悲劇的な結末の岐れと思える。一方、青年団が出世の基盤と成った接点の有るとは言え、胡と蒋経国の関連付けにも違和感を覚える。蒋の面影や指向性は巡り巡って、ソ連留学、ソ連人との結婚及び特務機関掌握の経歴で、胡と世代が近いKGB出身の露大統領に繋がる。

其の最期の転換の決断は声価を高めたが、所謂「蓋棺論定」(棺を蓋って評価が定まる)は、掉尾の一振りですべてを判断するわけでもない。最晩年の毛は死後「文革」が否定されるのを懸念し、党中央決議の形で「3分錯誤, 7分成績」(誤りが3割, 功績が7割)の評価を下そうとした。踏絵と成る其の起草の委託を謝絶した鄧は失脚した⁷⁸⁾が、毛が秘かに心配していた自身への公式評価は、鄧の時代でも其の「3・7開」であった。鄧は自分に関しては「対半開」

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」(1)（夏）

（5分5分）で満足すると語った⁷⁹⁾が、其の控え目な自己採点か、巷で囁かれている毛の「倒三七開」（正の評価が3割^{プラス}、負の評価が7割の逆3分・7分）は、蔣経国にも当て嵌まるのかも知れない。

李登輝は蔣経国15周年忌前に其の多くの指示を公開し、彼の礼讃者は恐怖政治の内情を知らぬ人ばかりだと揶揄した⁸⁰⁾。確信犯的に台湾独立派に政権を渡し国民党と縁を切った李は、中共から離脱した過去と併せて不義理な変り身が目立つ⁸¹⁾が、「政治文明」に踏み切る前の2党に不徳が多かったのも事実だ。民心が民進党に傾き国民党体制が終焉した最大な要因は「黒金」への嫌悪だが、其の「黒社会」（極道）との癒着も金権政治も蔣氏父子の負の遺産に他ならない。蔣経国時代の台湾に米国並みの政治の民主と効率化を感じ、日本の手本に挙げた松下幸之助⁸²⁾も、表面的な開明・繁栄しか見ていなかった恐れが有る。

但し、縦令い一面的であったとしても、経済成長を支える政治の効率化に着目した点で、其の頃の台湾の「利治」の本質を掴んでいた。早年に上海で極道組織の構成員と証券品物交易所の^{マネージャー}經紀人を務めた蒋介石の経歴⁸³⁾は正に「黒・金」であり、其の黒い利欲が根底を成した「力治+利治」は必然的に腐敗を生む物だった。蔣は辛亥革命の翌年に親分の政敵を暗殺し、其の「武勇譚」は長らく最大な禁忌として封印され続けた。72年後に彼の長男の暗部を暴いた作家が謀報機関の指図で極道に暗殺され、^{スキャンダル}醜聞の発覚が高齢の当人の急激な歴史清算を決意させたのは、時代の反転を感じさせた歴史の因縁としか言い様が無い。

其の急転直下は鄧の天安門事件後の南巡と重なるが、共に「力治」の行き過ぎや逆効果への反省が^{ショック}衝撃療法の針金と成った。先代及び自分への否定なので激痛が想像し得るが、憂患が我慢の限界を超えた結果と言える。「文革」の評価は紅衛兵の熱狂な賛美 終盤の毛の「誤り3割」の譲歩 華国鋒の曖昧糊塗 鄧の全面否定、と段階的ながら遂に正反対に至ったが、此も^{まさ}正しく「物極必反」の帰着である。第2次天安門事件の再評価が第1次に比べて進まぬのは、「動乱」の断罪が「風波」に取って代わられた暗黙の軌道修正や、大衆への実利提供に因る補填^{トラウマ}で創傷が和らいだ事を考えれば、正当性は別として合理性を感じる。

（未完）

2003. 1. 31（中国旧暦の壬午年大晦日。馬年生まれの筆者の人生4番目の「本命年」〔自分の生まれ年。中国では男女を問わず厄年〕が終わる日）

[解題] 本稿は、01年度末以来の本誌14巻4号～15巻2号に連載した『「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（1～3）』の続篇に当る。当初は前号で^{シリーズ}系列論考を完結する予定だったが、最終回の原稿は所定の枚数を大幅に超過した上で、脱稿直前の党大会の刺激で更に加筆の必要が生じた。連載回数の節度や連載論文が好ましくないと言う前号の記念号の性質を考慮して、「順時針演変」の新機軸で第2弾の

シリーズ
系列として出す事にした。前々号連載分の最後に「未完、以下次号」と予告したが、「順天応人」の宗旨に沿った臨機応変として容赦されたい。形式上は別論文の体裁を取り、註も前篇に続く通し番号を用いないが、実質的に中身が一体と成る事を念頭に置いて戴き、諸賢の高覧・批判を願いたい。

此の論考も党大会の合言葉「与時俱进」(時代と俱に進む)の産物と成ったが、紙幅の制限と内容の連続性を勘案して、前篇と重複の訳文や説明、乃至「4 諦図」「太極図」の原型等の再掲を可能な限り控えた。前出の「此一時也、彼一時也」「彼亦一是非、此亦一是非」と割り切った上で、此の命題が出た前篇との併読を薦める。

注

- 1) 中国社会科学院 + 清華大学国情研究中心編, 胡鞍鋼主編『地区与発展: 西部開発新戦略』(中国計
劃出版社, 2001年), 6頁。胡は朱首相の智囊として日本でも名高いが、其の観点及び政策決定へ
の影響に対する論証は、中国経済への関心度が高い割には日本では少ない(注4参照)。此の
「4 個世界」論の注目度は更に低く、田中修『中国第10次5 年計画 中国経済をどう読むか』
(蒼蒼社, '01年)等、極く少数の文献で紹介された程度にとどまる。
- 2) 1981年9月30日、全人代委員長・葉劍英の名義で発せられた対台湾の平和的な統一に関する9項
建議の中に、「台湾地方政府遇到困難時、可由中央政府酌情補助」と有った。韓文甫は此を「笑
話」(笑い種)とし、「文革」の所為で大陸の台湾研究が60年代の水準に止まり、未だ彼岸は貧
困・落後の状態に在ると誤認した事に原因を帰した。(『鄧小平伝 治国篇』, 台湾・明報出版社,
93年, 648~649頁)
其の時点の双方の経済力に関して言えば、大陸の夜郎自大と見られても仕方が無いが、同じ
「亜細亜の4小龍」の一員の香港が'97年の亜細亜金融危機で、台湾並みの外貨準備高を擁しなが
ら域外の機関投資家(「機関投資家」を擬った筆者の造語)の仕掛けで危機に陥り、必死な介入
防衛と共に中国の政治力を借りた(と噂される)末、漸く凌いだ一幕を思い起こせば、台湾も未
来永劫に全ての経済危機を自力で乗り切れるとは限らぬ。
件の提言は共産党中国の建国32周年記念日の前夜に打ち出されたのだが、中華民国設立70周
年(10月10日)の直前に当る時期も興味深い。台湾が其の頃に大陸に負けぬ経済力を持ったのは、
「腐っても鯛」と言う通りかも知れない。但し、腐った鯛は何時までも優位が保てる保証が無い。
共産党中国の建国70周年は奇しくも、中国現代史の幕開け 5.4新文化運動、「新民主主義革
命」の百周年に当るが、其の頃には兩岸の力関係は決定的な逆転に至っているはずで、仮に分裂
が続いていく場合は、中央政府が情状酌量で台湾に援助を与える事も冗談ではなく成ろう。
- 3) 『鄧小平文選』に収録された言説には、生産力向上への寄与を直ちに指導者の評価基準とする論
断は意外と少ない。「黒い猫でも、白い猫でも、鼠が獲れる猫は黒い猫だ」という「文革」前の
激論(62年7月7日、共産主義青年団第3期7中全会代表に対する講話。『怎樣恢復農業生産』,
『鄧小平文選』第1巻第2版, 人民出版社, 94年, 323頁)を思い起こせば、不思議な気もするが、
最晩年の毛沢東が其を蒸し返して批判した記憶の新しさや、毛死後の守旧勢力の抵抗の根強さを
考えると、建前の更新に慎重な姿勢として頷ける。一方、生産力の向上を国家や共産党政権の使

命とした明言は、『高挙毛沢東思想旗幟，堅持实事求是の原則』（78年9月16日。『鄧小平文選』第2巻，人民出版社，83年，128頁）を始め，数度出ている。集中的な言及は，80年4～5月の4回の談話（『社会主義首要発展生産力』，同上，311～314頁）である。

- 4) 人口地理学者・胡煥庸が1930年代に，人口分布の地理分界線の「愛琿 - 騰衝線」を発見した。胡氏の研究に拠ると，中国地図をほぼ45度の斜線で右上の黒龍江省愛琿と左下の雲南省騰衝を繋ぐと，斜線以西は全国土面積の52%を占めるのに人口は5%に過ぎず，逆に面積が48%の以西の人口は95%にも上る。此の分布構造は百年來殆ど変わっていない，と言う。（朱建栄『中国2020年への道』，日本放送出版協会，1998年，73～74頁。本稿筆者註：旧地名の「愛琿」は『辞海』の解の通り，正しくは「瑗琿」，1956年に「愛輝」に改称，1983年に同県は黒河市への編入に伴い解消。）

朱建栄も編者の1員である『岩波現代中国事典』の「黒河 - 騰衝線」の項（若林敬子執筆）では，提起当初（1933年）の胡煥庸学説から外蒙古を除いた1981年の数値が示されている。斜線の以東と以西の面積は上記の調整で42.9%対57.1%と成ったが，建国後の辺境開発支援に因る漢人の西部移住にも関わらず，94.2%対5.8%の比率は当初の96%対4%（上記朱建栄の記述と異なる）と大きく変わっていない，と言う（327～328頁）。本稿筆者は続編の系列論考で他のデータと併せて，中国の物心両面の風土の不易性を検証する予定だが，本稿で指摘した建国後の西部開発の効果の乏しさは此の数字でも裏付けられる。

胡錦涛の時代では東西の格差は一層重石と成り，「大西部開発」の重要性は益々増して行くが，「大西北」と「大東南」（本稿筆者の造語）の人口疎密の「地理 - 国勢溝」（筆者の造語）を発見した胡煥庸（1901 - 98）と，其の生誕百周年に経済格差で国内の「4個世界」の区分を唱えた胡鞍鋼と，歴史的・今日的な課題の解決の重任が与えられた胡錦涛とは，同じ姓の連環で繋がっている。因みに，1953年に遼寧省鞍山市で生まれた胡鞍鋼の名前は，毛・鄧時代の国内最大の製鉄所 鞍山鋼鉄会社の略称である。名称が似通い同じ国内10大製鉄所に入る馬鞍山鋼鉄会社は，他ならぬ胡錦涛の本籍地・安徽省に在る。

鉄鋼工業を経済発展の「元帥」と位置付けた毛の時代では，鞍山製鉄所の典範の役割は絶大であった。其の象徴には『鞍鋼憲法』が挙げられるが，60年頃に毛が賞讃した其の企業管理原則は，ソ連の『馬鋼憲法』に対抗する物である。「馬鋼」はマグネイトゴルスクコンビナートの中国流略語だが，同じ略称を持つ馬鞍山製鉄所は，『鞍鋼憲法』の精神主義が「文革」後に否定され，鞍山製鉄所の生産高の首座が上海宝山製鉄所，首都製鉄所に奪われる直前の93年，業界初の株式会社化を経て馬鞍山製鉄所が香港で株式上場を果たした。百年来の中国近代化の日本 ソ連 新嘉坡 米国の移行に関する別の論考でも，此の事象を取り上げたいが，製鉄所の株式会社化で安徽が先陣を切った事は本稿で象徴性を持つ。因みに，胡錦涛と同じ安徽出身で新指導部で序列2位の呉邦国の古巣 上海電子真空管工場も，上海株式市場に最も早く上場した企業である。

企業統治の準則を「憲法」と名付ける処は，本稿筆者が複数の系列論文で考察して行く政治と企業の統治（註41，42の「ガバナンス」語釈参照）の相関と関わる。志向が微妙に違う南北2「鞍鋼」と「憲法」は，60年代の2主席が政治闘争で憲法を矛か盾にした一幕（註60参照）を連想させる。「矛盾」（対立。衝突）の双方の毛と劉少奇の生家が至近距離に在る事は，江沢民の故郷と胡錦涛の第2の故郷（泰州）の至近距離と共に，中共指導部や中国歴史の「演変」の枢軸の「数軸」（本稿筆者の造語。「数本の軸」「天数の軸」の両義。猶，中国語の「枢」^{シユ}「数」^{シヨウ}は同音）集中の傾向を物語っている（後述）。

朱鎔基の最初の仕事場 52年の東北の重工業畑は、正に胡鞍鋼の出生の時期・地域と重なる。巡り巡って其の胡は朱の智囊^{ブレイン}に成り、所属の清華大学公共管理学院も、朱総理が長らく兼任していた同大学経済管理学院（公務繁忙の為2001年に辞任）と密接な関係に在る。朱は建国初期の「東北王」・高崗の失脚後に、上司・馬洪の連座と自身の「右派」舌禍に因り、20年余りの不遇を強いられた。毛に退けられ鄧の時代に経済改革の主要立案者として活躍した馬は、「文革」終了の翌年に中国社会科学院副院長に就任した（82～85年に院長）が、胡鞍鋼が主任（首席）を務める国情研究中心の母体の1つが同院（清華大学と提携運営）であり、朱も曾て78年に同院工業経済研究所（所長は馬洪兼任）工業経済研究室主任を務めた。改革・開放元年に漸く党籍が復活した朱の「右派」体験は、方励之・王蒙・白樺・劉賓雁（註30, 39, 65, 73参照）と共通するが、高崗と同じ陝西出身の胡啓立（註5参照）から本稿の別の切り口が生じる。

鄧・江時代の党指導部の頂点に於ける共青团出身の「三胡」（胡耀邦・胡啓立・胡錦濤）に就いて、後に地政・「人縁」に絡んで政治「関係」（相関。人脈）学から論考するが、現代史と地域発展の文脈で此の変則の「三胡」にも着眼したい。02年の訪米で“Who is Hu?”と擲揄されたが、後に詳述する此の「胡は誰？」の疑問は胡鞍鋼と胡煥庸にも通じる。紙幅の関係も有り2人の点描は、其の業績の注目点や歴史背景・時代精神、及び「三胡」の接点に絡んで後の本論に譲るが、『辞海』99年版で中国の地理人口学の「奠基人」（創設者）とされた胡煥庸の視座・論座と、本稿註15で言及した経済・国力に於ける地理・人口の重要性との関連を強調して置きたい。

- 5) 例外的に、陝西出身の高崗が抗日戦争中の党中央所在地 陝西北部根拠地の建設の功労も有って、党・国家の副主席に成ったが、建国の数年後に政争に敗れ自決し、更に数年後に陝西組の習仲勳副総理も肅清された。陝西出身の胡啓立の浮沈は本稿か次の系列論考の考察に譲るが、歴代の国家主席・副主席の顔触れを觀ても、高崗と蒙古族の烏蘭夫（1983～88年在任）を除いて、極貧地域の出身者は余り見当たらない。少数民族優遇策の一環と考えられる烏蘭夫の就任は、極貧地域から指導者が稀に出ない現実の裏返しとも取れよう。「第4世界」の出身者も極貧家庭の生まれとは限らぬので、極貧層から国家指導者が出た比率は益々低い。
- 6) R・ニクソン著、徳岡孝夫訳『指導者とは』、文芸春秋、1986年[原典=LEADERS, 82年], 9頁。
- 7) 行政命令に由る建国後の文化事業の調整の結果、全国から北京に人材・資源が無制限に集まったのは周知の事実だが、上海で生まれ育ち来日前に首都の政府「智库」^{シンクタンク}・中国社会科学院に勤務した本稿筆者が些か驚いたのは、楊東平が『北京人と上海人 攻防と葛藤の20世紀』（趙宏偉・青木まさこ編訳、NHK出版、97年。原典=『城市季風 北京和上海的文化精神』、94年）の中で挙げた南北2大都会の劇的な逆転 大学数は48年の上海36対北京13 4年後の上海15対北京26、出版社数は上海321（52年）対北京3（49年） 上海33（89年）対北京320（87年）、新聞社数は48年の上海200余り対北京82 91年の上海82対北京の159、雑誌数も同上の上海88対北京27 上海159対北京945（95～96頁）。
- 8) 其々1897、1912年に創設した商務印書館、中華書局、及び三聯書店が建国後に北京に移った（楊東平『北京人と上海人』、96頁）が、毛沢東は1957年に愛読の『辞海』の改訂を上海の学者集団に委託した（毛の図書係を長年務め鄧小平時代に中共中央文献研究室主任に成った逢先知も『毛沢東の読書生活』の中で、「間も無く上海に大勢の優秀な学者が集まり、膨大な再編集の作業が始まった」と述べた。日本語版[竹内実・浅野純一訳、サイマル出版会、95年。原典=龔育之・逢先知・石仲泉『毛沢東的読書生活』、三聯書店、86年], 12頁）。因って、30年代に商務印

書館から出た此の権威有る大辞典は、上海辞書出版社の「専利」(特許)と成った。周恩来の執務室や林彪の応接間にも『辞海』が置かれていた事は、中共の首脳部に対する上海の頭脳の影響の証だ。

『辞海』の改訂責任者の1人に指名された陳望道は、他ならぬ『共産党宣言』の最初の中国語全訳(1920年)の訳者だ。彼の教育家・言語学者・社会思想家は浙江の出身であるが、20年に陳独秀等と共に上海共産主義小組を創設し、翌年に建党した中共の上海地区委員会初代書記に就任し、建国後は上海随一の文科大学・復旦大学の学長を務めたから、半分以上の上海人と観て差し支えない。彼は23年に陳総書記の家長的な独裁に堪えられず脱党し、57年に再び入党したが、其の年に毛の家長制独裁が台頭したのは皮肉な事だ。彼は58年に『辞海』副主編(副主幹)、2年後に逝去した舒新城に代わって主編に就任したが、共に毛に影響を与えた『共産党宣言』と『辞海』の対は興味深い。最新の党規約から『共産党宣言』の文言が消えたが、陳の代表作・『修辭学発凡』に因んで言えば、マルクス主義は後退しても漢語は不滅である事だ。

猶、建国後の毛が特に愛読した新聞には、上海の知識人向けの『文匯報』が有り、特に其の「副刊」(文学作品や学術論考等を掲載する学芸欄)が気に入った(57年の「反右派」で彼が最初に此の新聞を槍玉に上げたのも運命の悪戯だが、後述に譲る)。最晩年の周恩来が枕元に常に置いていた本は、上海古籍出版社刊行の『宋詞選』である(張佐良著、早坂義征訳『周恩来・最後の10年 或る主治医の回想録』、日本経済新聞社、99年[原典=97年]、376頁)。彼が初代国産品の上海製腕時計を逝去まで愛用し続けた事(程華編著『周恩来和他的秘書們』、中国廣播電視出版社、92年、434~435頁)と合わせて、上海の「土+工+商」の総合的な実力が窺われる。

- 9) 孫文は『在桂林学会歡迎会的演説』(1922年)の中で、「順乎天應乎人」を2度引いた(中山大學歴史系孫中山研究室・広東省社会科学院歴史研究所・中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室合編『孫中山全集』第6巻、中華書局、85年、68、72頁)。此の成句の出所は、『易経・兪卦第58』の「剛中而柔外，説以利貞。是以順乎天而應乎人。」
- 10) 「低度茅台酒」の初出時期は不詳であるが、少なくとも此の2種類が出回っている。中国酒に造詣の深い小泉武夫の『銘酒誕生』(講談社現代新書、96年)にも、53度~60度の本格的な白酒を敬遠する若年層の出現で、40度や30度の物が出回る様に成ったソフト化が言及された(60~61頁)。同書では茅台酒は53~65度と記された(114頁)が、共に中国の銘酒の筆頭を成す瀘州(四川)老窖特曲酒に就いては、60度と55度(輸出用)が有ると紹介された(87頁)。
- 11) 『論語・子路篇第13』。
- 12) 『管子・治国第48』の冒頭の言：「凡治国之道，必先富民。民富則易治也，民窮則難治也。(略)民富則安郷重家，安郷重家則敬上畏罪，敬上畏罪則易治也。民貧則危郷輕家，危郷輕家則敢陵上犯禁，陵上犯禁則難治也。故治国常富，而乱国常貧。是以善為国者，必先富民，然後治之。」
- 13) 『管子・牧民第1』の冒頭の段落の言。「倉廩実則知礼節」は『管子・事語第71』でも繰り返された。猶、『管子』の巻頭の篇名『牧民』には、民衆を牧養する事を治世の本質とした管子の政治観念が窺えるが、隋の新都・大興の碁盤状の街路の区画を「家畜の檻の発想」の産物とし、統一国家・隋の統治思想の原点を遊牧民族の家畜統率に求めた大室幹雄(千葉大学教授)の仮説(夏剛『「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(2)』[本誌15巻1号、2000年]註93参照)と併せ考えれば興味深い。
- 14) 45) 66) 夏剛『現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熱読」 「迎接新千年」盛典を巡る首脳と「喉舌」の2重奏と其の底流の謎解き(2)』(『立命館言語文化研究』14

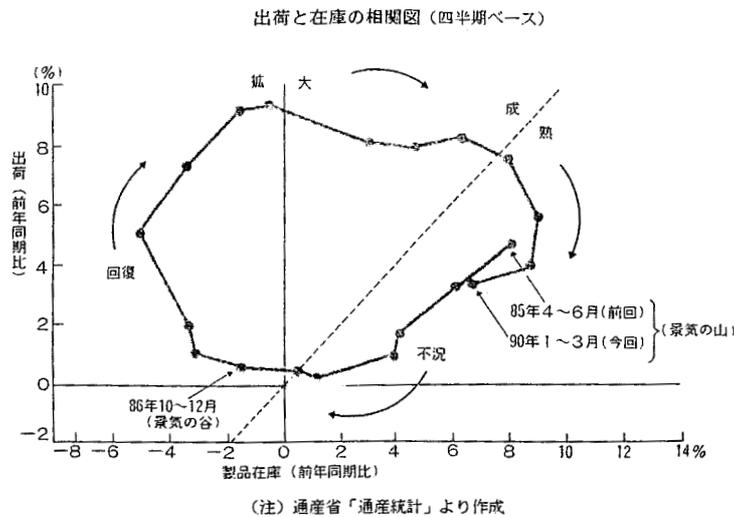
巻3号, 2002年) 参照。

- 15) 世の中の万物の中で最も貴重な存在は人間であり、共産党の指導の下で人間こそ居れば如何なる奇跡も造れるとか、人が多ければ遣る気が盛り上がるとか言う毛の建国後の論調は、人間の能動性を絶対視する嫌いが有った。其の時代の中国の自慢の成句 「地大物博, 人口衆多」(国土が広大で物産が豊富で、人口が多い) は、彼の死後に1人当りの物産の貧弱に繋がる大所帯の負の面が指摘された。「多勢に無勢」の論理に即して言えば、大勢の人口は総合的な国力の増強への寄与も否めないが、分母の大きさに伴う自己資本率や収益率の稀薄化も看過できぬ。此の8字熟語の字面にも出た物量主義は、毛の時代に限らぬ建設・戦争の大海戦術の根底に有ったが、「人多好干活, 人少好吃饭」(人が多い方が仕事は遣り易く、人が少ない方が飯を食い易い) という諺の通り、人数と利益配分の満足度は反比例に成る。人の質や連携の問題を考えれば、「人多好干活」の前提まで疑わしい。
- 16) 17) 夏剛『「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(2)』参照。
- 18) 李文卿『近看許世友(1967 - 1985)』(解放軍文芸出版社, 2002年)に拠ると、「左派」と「右派」の席が其々毛の左側と右側に成ったのは、林彪・「4人組」が考えた意地悪な配置である(151頁)。毛は党大会の半年前の中央総会で、陳毅は右派を代表する資格が有ると語ったから、毛の意思とも取れなくはない。但し毛の発言は、老元帥・実務派等に難壇の最前列の席を与える口実とも裏読みできる。実際にも、「右派」代表が毛と肩を並べて坐った場面は、徐海東大將が毛の計らいで酸素吸入装置を付けた儘「主席台」の一隅に登場した光景と共に、「文革」の批判対象の人々には一縷の希望を覚えさせた。毛は人間の両手を以て左右両派の存在の合理性を説き、社会を左・中・右と分けたが、左右両方に擁される形で真ん中に構えた彼の位置は、中国や中央の「中」の真髄を体現した物である。
- 19) 1967年11月3日の『人民日報』に、『大樹特樹毛主席の絶対權威』(毛主席の絶対的な權威を大いに樹立し特に樹立しよう)と題する論文が掲載された。「総參謀部無産階級造反派」が執筆し、陳伯達が毛の機嫌を取る為に発表を許可し、林彪の意思で総參謀長代理・楊成武の名義に変わった。毛は事前に楊から決裁を仰がれた時に適当に処理せよと言ったが、新聞を見ると「標題から間違っている」と激怒した。權威の樹立は自然に出来る物で人工的には無理だ、と彼は12月26日(74歳誕生日)に異論を再度表明した(産経新聞「毛沢東秘録」取材班編著『毛沢東秘録』下、産経新聞社、99年、40~44頁)が、權威が未だ不十分で樹立の必要が有るとの含みも逆鱗に触れたと思われる。
- 猶、此の一齣は毛の我が儘を如実に現わした。楊は数ヵ月後に毛の支持を失い失脚したが、彼を敵視した林彪の署名変更の提案に仕掛けられた結果だとすれば、林の毛に対する洞察と詭計の巧妙さは誠に恐ろしい。
- 20) 上山春平『神々の体系 深層文化の試掘』, 中公新書, 1972年, 53~55頁。
- 21) 「在庫時計」は別称の「景気時計」と共に、各種の国語辞典には見当らず(「百科全書+国語辞典の最高峰」と自讃した『広辞苑』でも、「在庫」の関連語彙は「~循環」「~投資」のみ、「景気」の関連語彙は「~循環」「~指標」「~変動」のみ)、多くの経済学辞典や解説書にも単独の項と成っていない。本稿筆者が依拠したのは、85年以來のロングセラー・『ゼミナール日本経済入門』(日本経済新聞社)である。
- 96年版(日本経済新聞社編)の解説に拠ると、89~92年に掛けて「エコノミストの間で「景気時計」作りがブームに成り、90年夏に「景気時計」論争が白熱した。火付け役の1人・田原昭

共産党中国の4世代指導者の「順時計演変（時計廻りの移行）」(1)(夏)

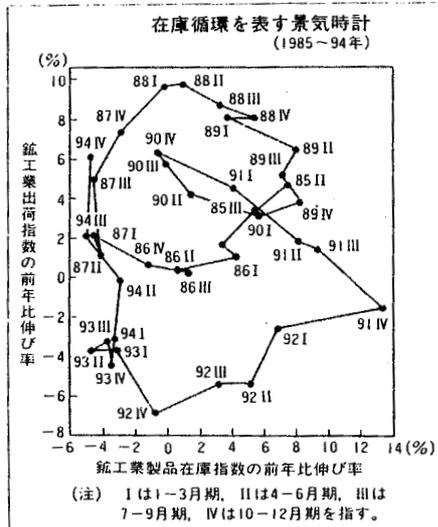
四（南山大学教授）は論文・『新しいなみ景気論は幻想である』の中で、田原式「景気時計」を紹介し、景気は既に90年1～3月期にピークを打ち下降局面に向かっている、との景気午後6時論を展開した。田原式「景気時計」とは、グラフの横軸に製品在庫の前年比伸び率、縦軸に鉱工業出荷の伸び率を取った物で、実在庫循環をグラフにした物に他ならない。（36～37頁）

其の田原論文（『エコノミスト』誌 90年5月22日号）を検索すると、件の「出荷と在庫の相関図」(29頁)は、正に「今回の在庫調整の特徴」と自覚した物である。



田原論文は此の図に就いて、次の様に説明している。「出荷指数と在庫指数の関係を示した物で、景気判断材料として広く利用されている。景気の谷を基準にすると、両者は景気の山に向かって時計廻りの円形の循環図を描くのが従来から共通した現象である。景気の1周期を回復期、拡張期、成熟期、不況初期、不況後期の5局面に分けると、出荷と在庫は此等の局面に沿って次の様に変化する。出荷は増加 増勢加速 増勢鈍化 伸び悩み 停滞、在庫は減勢加速 増加、増勢加速 増勢鈍化 減少、という順序である。従って、在庫は出荷より1局面遅れて変動する。」
 「過去の例に拠ると、需給バランスの目安である45度線の右下にカーブが移動すると、景気は間もなく山場を迎える。其の後は出荷が伸び悩み、累増した在庫の調整が進む為不況局面に移行する。現在は正にそういう局面に位置している。」(29頁)

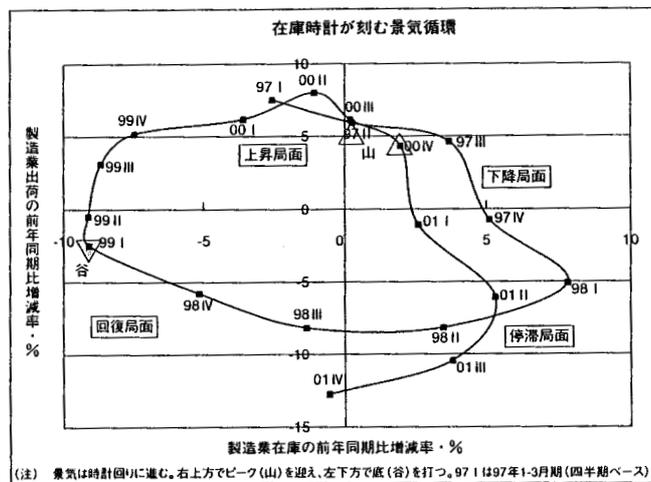
『ゼミナル日本経済入門』96年版は其の見解に対して、「在庫循環を表す景気時計」の図式を付けて斯く論評した。「だが、平成景気は単純な景気時計通りには動かなかった。右上方にきた後、再び左上方に向かって回転を始めたのである。然し、此の回転は途中で挫折してう。90年10～12月まで左上方に上がった後、突如、右下方に向かって落ちて来る。91年1～3月でピークを打ち、下降に転じた事を物語っている様に見える。ノ平成景気の判断が難しかった1つの要因が此の景気時計に表れている。従来の在庫循環と違ってしづとく“二枚腰”を見せたからだ。だから次の回復への判断も一筋縄では行かないかも知れない。景気時計の下半分を彷徨うエコノミスト泣かせの展開に成る可能性も十分有る。」(36～37頁)



田原論文の図式は均質な円弧を描いただけに説得力が自ずと有ったが、其の後の展開に照合するまでもなく、余りにも綺麗な図式や整然たる結論ほど、読者の警戒と研究者の自戒が必要であろう。本稿も4世代指導者の「^{とけいまわり}順時計」移行を便宜上、均等の4区分概念図で示したが、実際は決して一筋縄で行く物でない事を断って置こう。特に精密計量が不可能な統治文化の分野では、「鳥籠統治」の略語の「籠統」(概略的。大雑把)の方が似合うのかも知れない。田原論文の余りに好都合な図式例示以上に、本稿の「時計循環」の図式と概括は「御都合主義」の批判を招き易い。「都合」の中国語の語義に即して言えば、「全て合う」様に成らなくても「合計。引く包めて」の正しい把握が出来れば十分だ。

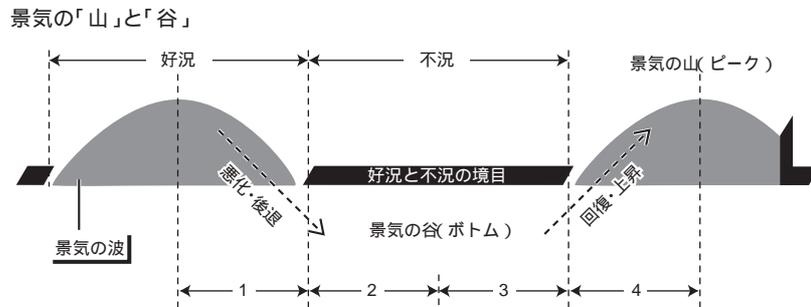
「在庫時計」の観方に注目した理由は先ず、在庫調整の売り残りに因る在庫増大 在庫削減 過剰削減 在庫積み増しは、其の4段階の展開も消長・回帰の原理も「対の思想」に符合する為だ。景気の山に向かって時計回りの円形の循環を描く上記の図式の中で、経済の浮沈を示す山・谷の高低と共に示唆的なのは、全体の流れの起点に当たる時計の原点の存在、別に0時恰度の処に位置せぬ其の原点の实事求是の在り方、明暗を分ける45度斜線の区分である。「午後6時」の規定も本稿後出の「朝8, 9時の太陽」と関わるが、本稿の4区分時計循環図も陰陽の対の2乗から成るが、陽の極みに当たる右上は『易经』の言う「上九, 亢龍有悔」(上九〔の相〕, 亢龍^{くわい}悔有り)の様に寧ろ要注意で、逆に左下の方は「太陰」と同じく逆説的な価値優位を持つ。

『ゼミナル日本経済 2002年版』(三橋規宏・内田茂男・池田吉紀, 02年)の図表・「在庫時計が刻む景気循環」(44頁)も併せて転載させて貰うが、第2章『景気の謎を解く』の「夜明



け前指す“在庫時計”の1節の講釈では、「在庫時計」は即ち「横軸に在庫の前年比伸び率，横軸に出荷の前年比伸び率を取ったグラフ」で、「在庫と出荷のポジションがピーク時には右上方に在るが，次第に時計方向に動き，ボトム（底）では左下方に位置し，景気上昇と共に右上方に上がって来る。此の一連の動きが時計の針の動きに似ているので“景気時計”と呼ばれる様になった。」(43頁)

次の「景気の“山”と“谷”」の図（第一勧銀総合研究所編著『経済用語の基礎知識』，ダイヤモンド社，02年，11頁）の様に，景気循環の高低は一般的に平面図で表示する事が多い。現代中国の歩みも好く単に縦軸か横軸に沿う図式で描かれ（紙幅の制限で割愛），中軸の両側を揺れ動く円弧は紆余曲折を直観的に展示する効果が強いが，本稿筆者は其の平面的な時系列での「波浪式的前進」に止まらず，対の発想に基づく縦軸+横軸の複合の上に立って，「螺旋形的上昇」の断面を時計風の循環図で追求したい。



猶，経済分野には様々な時計循環図が有る。『ゼミナール日本経済』96年版の第2章・『景気を読む』の上記の「在庫調整」の後，「耐久消費財調整」の部分で，「横軸に耐久消費財ストックの伸び，縦軸に実質耐久消費の伸びを取り，4半期毎の動きを図に書いてみよう。先ほどの在庫調整の景気時計に似た時計廻りの軌道が描かれる。」(37～38頁)一方，株式市場の盛衰・消長を捉える時計風循環図では，株価と出来高を其々縦軸と横軸に取り，25営業日の移動平均線に抛る日々^{シリアス}の交点を結んだ線は，時計と反対の左廻りの曲線に成る事が多い故「逆ウォッチ曲線」と呼ぶ（紙幅の関係で図式は割愛し，続篇の系列論考で取り上げる予定）。

- 22)「法出於礼，礼出於治。治礼道也。万物待治礼，而後定。凡万物，陰陽両生而參視（礼）」(『管子・枢言第12』)
- 23)『辞海』の「九九」の解。
- 24) 毛に関する一部の年表等では，「秋收起義」は8月18日と記されているが，此の日は毛が中央特派員として蜂起準備の会議に参加した日で，実際に蜂起が起きたのは9月9日の事である（晁峰・明軍編『毛沢東之謎』，中国人民大学出版社，92年，88～90頁）。49年後の毛の死去と同じく必然性が無いだけに，天意を感じさせた偶然の一致である。
- 25)「七十三，八十四，閻王不招自己去」(73，84歳に成ると，閻魔王[死神]が招かなくても^{おの}自ずと行く)という諺を，毛は晩年に何度も外賓や周囲に聞かせた。筆者は『了却天下事・贏得身後名』「只争朝夕・常懷千歲憂」：指導者の自意識と強迫観念()』(本誌13巻1号，00年)で論考した事が有るが，本稿の主旨に即して注目したい事象は，諸文献に出た最初の言及の時期，

相手と内容である。61年9月に武漢で英国のモンゴメリー元帥と会見した際、彼は此の熟語を引いて余生幾許の心境を吐露し、マルクスに会いに行く（彼の世に逝く）為の4ヵ年計画を立てていると言った。劉少奇が後継者であると初めて明言したのも同じ席上（暁峰・明軍編『毛沢東之謎』、56頁）だから重みがあるが、満68歳前の年齢を考えれば彼の慣用の政治的な煙幕の匂いもする。「史上最大の作戦」を指揮した第2次世界大戦の老兵に語った処には、寧ろ「老当益壮」（老いて益々盛ん）の雄心も秘めていた様な気もするが、反面、「3年自然災害」の真っ最中の鬱勃さも混じっていたらう。同年9月9日に書いた「無限風光在險峰」に、本稿筆者は冬に近い「悲涼」の気配を感じ取った（後述）が、初めて死神の足音に触れた時期との符合でも裏付けられよう。

- 26) 『紅樓夢』第2回の中の冷子興の台詞：「亏你是進士出身，原来不通！古人有云：‘百足之虫，死而不僵。’」（進士出身のお方なのに、案外お解りでないのね。古人が云うには、「百本足の虫は、死んでも倒れず。」）人民文学出版社1990年版（中国芸術研究院紅樓夢研究所校註）の注釈では、三国時代の魏の曹叅の『六代論』の「故語曰：‘百足之虫，死而不僵’，扶之者衆也。」を出所に挙げ、其の依拠と成る最初の原典は未詳の儘である。戦国時代の魯仲連の言葉が語源とも言われるが、理論上、「語曰」の語り手が引用者の曹叅自身の可能性も排除し切れない。「～と思われる」「～と言われる」の形で自らの考えを表わす日本流と通じて、中国でも言わば「没我的な主我」（筆者の命題）の表現がある。

人民文学出版社刊本では此の8字成句の語釈は、「大貴族官僚家庭が衰微していても或る種の表面的な繁栄を維持できる事の比喻」と成っている。第2回（話）の題『賈夫人仙逝揚州城 冷子興演說榮國府』（賈夫人、揚州の城にて他界し 冷子興、榮家の史を講釈す）に出た揚州は、満州族高級官僚の家庭で生まれた著者・曹雪芹と同じく、清王朝の栄枯盛衰を先取りして衰微へ滑ったのである。

直接の関係は無いものの、其の題と重なる様に江沢民は揚州の人で演説好きが有名だ。本稿は江の文化的な背景として出身地に光を当て、『立命館言語文化研究』14巻2～3号（2002年）連載中の『現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熱読」 「迎接新千年」盛典を巡る首脳と「喉舌」の2重奏と其の底流の謎解き』は、其の演説が契機及び材料と成る。其々党・国の軌跡と領袖の「心跡」を掘り下げる2つの系列論者は、又毛の詩歌で繋がっている。

- 27) 第8期党中央第12回総会開幕の3日後の1968年10月16日、『紅旗』誌の社説・『無産階級の新鮮な血液を吸収しよう』の中で、毛の「吐故納新」に由る党の整頓の指示が伝達された。人体の摂理を用いた毛の比喻は流石に巧みで、彼の党中央理論誌の社説の題も立派な正論だが、総会で毛が王洪文等の造反派を顕彰し劉少奇の党籍を剥奪した事は、其の「吐故納新」の質の悪さを物語っている。

- 28) 竹内実訳。武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩歌と人生』、文芸春秋新社、1965年、100頁。

- 29) 「正大光明」は乾清宮の正面に掲げられている扁額に書かれた熟語として有名。康熙の住まいだった此の場所は、雍正の時代には紫禁城内廷の最大な聖域と成った。雍正元年に、第4皇子・弘曆を世継ぎとする密書が扁額の裏側に隠し置かれた。生前に皇太子を立てる事の廃止は、内紛を避ける為の清朝独特の方策なのだ。最初の考案者・雍正帝が57歳で急死した際に、此の仕組みのお蔭で次世代（乾隆帝）への権力譲渡は順調に行なわれた。紫禁城の外向けの中心 太和殿と一対の聖域・禁域を成したが、陰・裏に当る此方の画龍点睛 「正大光明」は陽・表の性質を持ち、其の文面とは裏腹に密封の遺言が裏に秘蔵されたのは、中国の複雑系らしい絡繰である。林

彪集団の肅清を狙う毛は、「要光明正大，不要搞陰謀詭計」（光明正大であるべきで、陰謀詭計を弄じるな）と警告を発したが、其の時代の数々の密室政治や権謀術数は此の正論とずれている。又、孫文が揮毫した「天下為公」は南京中山陵の陵門等、毛沢東自筆の「為人民服務」は中南海の正門 新華門に掲げられる言葉だ。『礼記・礼運篇第9』の「天下為公」は、天下は公有物であり天子の私有物ではなく、天子の位は天が誰に授けられるという意味だが、聖域の主眼と成る以上の3点は、共に帝王思想の裏返しと見られる節が有る。

- 30) 天文学物理学者・方励之が1989年1月6日に鄧小平に書簡を送り、5.4運動70周年、建国40周年と仏蘭西革命2百周年の節目を引き合いに出し、魏京生（反体制運動・「北京の春」の思想的な指導者）等の政治犯の恩赦を求めた。其に触発されて2月中旬～3月中旬、知識人33人、科学者42人、文化人43人が其々同じ主旨の公開書簡を党中央や全人代に送り、天安門事件の遠因と成った。

方は2年前の同じ1月に「資産階級自由化」の鼓吹を理由に、鄧の指示で党籍剥奪・公職追放の処分を受けたが、84年に中国科学技術大学第1副校長（筆頭副学長）に就任して間も無く、30年前の「反右派運動」に次ぐ2度目の除名・解雇を喫した事は、曾57年「反右派」の陣頭指揮を執った鄧の「思想解放」の限界を露呈させた。方は翌2月に訪中のブッシュ米大統領のレセプションに招待されながら当局に出席を阻止され、天安門事件の翌日に夫人・李淑嫻（北京大学物理学部助教授）と共に北京の米大使館に避難し、翌年6月下旬に米中の取引で渡米が実現した。

相馬勝『中国共産党に消された人々』（小学館、02年）の第3章・『吼える改革者・方励之』には、中国人保護の前例が無く特例は作れぬ事を理由に、米大使館が方夫婦の避難を断り退去を求め、方が涙を流して5時間も粘った末に大使の判断で受け入れられた、との経緯が記されている（59頁）。米国の人権は此の様に無制限ではなく、自由も此の際は特別扱いを許さぬ平等精神と対立するわけだが、国益を軸に可・不可の判断を下し、必死の亡命希望者を追い返す事も辞さぬ米国の姿勢は、02年の瀋陽日本総領事館から中国側が「脱北（朝鮮）者」を連行した事件と結び付ければ興味深い。

其にしても、声涙俱に下った粘りで米国側を説き伏せた経緯は、^{したた}強かな中国人らしい。武力鎮圧の直前に相馬の取材に応じたのは、事件中の西側向けの最後の発言と成った。其の時さんざん共産党と鄧小平の悪口を言っただけ、必ず問題に成ると思って米大使館に逃げ込んだのだ、と彼は2年後に相馬に述懐した。「冗談とも本気とも付かない感じで、大笑いをしていたのが印象的だった。だが、私は其の発言の真意を聞き漏らしてしまった。」と相馬は言う（74頁）が、問い詰めても真意は教えて貰えるとは限らないし、当人にも表現や把握が難しい複数の真意の有り得る虚実皮膜も考えられよう。方は民主化運動の指導者たちの中で最も純粋と見られ、其の言動には科学者らしい無垢さが感じられる（G・トーマス著、吉田晋一郎訳『北京の長夜 ドキュメント天安門事件』、並木書房、93年〔原典＝91年〕に拠ると、米国中央情報局が訪中前のブッシュ大統領に出した報告書では、方は「中国のサハロフ」と描写され、「陽気で悪智慧が無い」事が特徴に挙げられた〔171頁〕が、其の通りであろう）。故に、亡命の根拠作りを見込んだ言行と勘繰る余地は無さそうだが、極限状況下の此の一幕は別の一面を現わした。

渡米後の方励之は自宅で域外の報道関係者の取材を受ける最中に、原稿料の振込先を訊ねる電話に出て淀み無く口座番号を伝え、傍の取材者に違和感を与えた事が報じられているが、中国的な複眼から観れば何も2重人格ではなく、理想主義と現実主義、人格者と生活者の同居に過ぎない。中国政府は許可の理由として、夫婦の病氣治療の為の懇願、反体制活動に対する改悛の意思

表示、出国後反中国の活動をしない誓約を公表したが、必要に迫られた2人の譲歩も現実主義の見本と思える。そもそも「悔改之意」は志向や目標への自己否定とは限らず、戦略や戦術に関する自省とも取れるし、反中共「反華」(反中国)と開き直る余地も有った。

各方面の建前と本音の乖離が否応無しに顕れた事は、方の亡命劇の見処の1つである。当局は駆け込み劇の7日後に彼を「反革命煽動宣伝罪」の刑事犯として指名手配したが、犯罪者庇護の罪名を米国に被らせようとの魂胆が見え見えだった。中国が法治の原則を武器としたのは如何にも奇妙であるが、米国が1年ほど方を大使館内に隠匿し続けたのは、著名人の特別扱いも含めて超法規的な性質が強い。他方、方夫妻の出国は米中双方の「お荷物」の善処と言えが、「政治文明」の兆しの様にも思われる。何しろ1927年の北京では、ソ連大使館西館の旧露西亜兵営に1年以上潜伏していた中共北方責任者・李大釗(38歳)が、張作霖の突入命令で無理矢理に他の国・共幹部60名余りと共に連れ出されて、22日後の4月28日に絞首刑に処された。張の本拠地だった瀋陽の日本総領事館で去年亡命者連行事件が起き、張が翌年に瀋陽郊外で日本軍に爆死され、其の6月4日未明が息子・学良の27歳誕生日の翌日で、方勵之を追い詰めた武力鎮圧の日と重なる事も、本稿の論旨に絡んだ不思議な「天数」である。

世界最強を誇る米国の在外大使館の警備に比べて、奉(奉天=瀋陽)系軍閥の闖入・連行を許したソ連の非力は些か情けない。『辞海』の「李大釗」の項で此の経緯に触れていないのは、当てに成らぬ相手に命を預けた故人の甘さを曝したくない節も多少有ろう。中共がソ連を心底から信用していなかったのは、其の衝撃と創傷も一因と考えられる。但し、李の挙動が方の政治避難の正当化の根拠に用いられたのも、歴史の面白い連環である。

共産党中国の現代化の典範はソ連 日本 新嘉坡 米国へと移行して来ており、其の「順時針」移行を別の系列論文で考察する予定だが、陳独秀と共に中共を創設した李大釗の結末や、「新文化運動」80周年の際の民主化運動の指導者の亡命先を觀ても、其の歴史の流れは確認できる。李の早稲田大学政治経済学科留学 北京大学経済学部教授兼図書館主任(館長)の経歴は、今の新指導部の面々と比べてやはり隔世の觀が有る。

措て置き、方勵之は斯くして「中国のサハロフ」の異名通り国際的に注目を浴びたが、体制内や国内での基盤を失った民主化運動の無力や、其の無力化を狙った当局の「寛大措置」の老獪も、彼の歩みで明らかになった。偽「満州国」皇帝・溥儀等の戦犯に対する恩赦は、好く中共政権の懐の深さの例示に挙げられるが、既に改悛・帰心・「去勢」と成った無害の遺物へ与えた寛大は、反体制活動家の「現行犯」(註73参照)には適用されないわけだ。

猶、本稿と関連する方勵之の経歴の注目点は、北京大学物理学部卒後に籍を置き、後に胡耀邦時代の学生運動の震源地と成った中国科学技術大学は、「新文化運動」の先鋒 北京大学教授の陳独秀・胡適、及び胡適と同族の胡錦濤の故郷 安徽に在る事だ。因みに、陳独秀・胡適と共に『新青年』誌を編集し、北大図書館管理員だった毛沢東の上司に当る李大釗は、1918年頃に毛に最も影響を与えマルクス主義の道へ導いた(金沖及主編、村田忠禧・黄辛監訳『毛沢東伝 1893 - 1949』、みすず書房、99年、[原典=中央文献出版社、96年]、上、42、49、54、57頁)。後年の「偉大的導師(教官。グル)」の早期の「導師」たる彼の其の長男・李葆華は、58年に水利電力部次官兼党組書記、61年に安徽省党委書記、73年に貴州省党委第2書記を務めたが、何れも胡錦濤の経歴と接点を持つ。此の様に広大な中国では、「人縁」の世界は意外と狭い。早年の毛と晩年の蔣経国に与えた胡適の影響も、胡錦濤時代の幕開けの際に振り返れば興味津津だが、詳論は後に譲る。

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」(1) (夏)

- 31) 天安門事件の中で嚴家其（中国社会科学院政治学研究所所長）・包遵信（中国社会科学院歴史研究所研究員）が起草した『5・17宣言』は、鄧小平を76年（正しくは77年）前に崩壊した封建王朝の皇帝に比した。
- 32) 朱建栄が『中国 第3の革命 ポスト江沢民時代の読み方』（中公新書、02年）の冒頭（iv頁）で引いた香港『明報』02年6月20日の報道に拠れば、江は01年11月に河北省の柏林禅寺を訪れた時に、自ら仏教と関わりが深い事を認め、座禅を組んで胃潰瘍が治った経験が有り、今も仏典の『金剛經』（弘法大師著）を読んでいると披露し、仏教を「我々中国人が最も受け入れ易い信仰である」とも語った。註33の毛の五台山観覽と関わるが、香港『開放』誌02年1月号の報道に拠れば、江は01年夏の北戴河会議の後、長男・綿恒のお供で五台山に登り仏像の前に敬虔な祈りを捧げたと言う（宮崎正弘『胡锦涛・中国の新覇権戦略』、KKベストセラーズ、02年、111頁）。何れも真偽は判らないが、仏教に理解を示し其の聖山や仏像に敬意を払う事は、中共指導者と雖も不思議ではない。思うに、仏教に対する体制の全面否定は「文革」を除いて、共産党時代も含めて中国の歴史には余り無かった。慈悲を唱える仏教は其ほど反対や警戒を招き難いが、「法輪功」の「真善忍」の理念に利用されたのも大衆受けの好さの証だ。
- 33) 毛は建国の前年に仏教の名山・五台山を遊覽した時に、或る廟の仏像の胸に大きな穴が空いているのを見た。中に黄金が内蔵されているとの噂を信じた農民が突き破ったと聞いて、其の物欲や破壊行為を咎める事も無く頷けた。別の廟で雨水祈願の為の龍王像の処に焼香が絶えぬのを見て、自らの利益との相関度に拠って待遇を使い分ける農民の考え方に理解を示した。（曉峰・明軍編『毛沢東之謎』、296～297頁、原典＝師哲『隨毛主席從延安到北平』）
- 猶、02年12月29日、比律賓で元大統領マルクスの巨大な胸像が爆破され、当局は財宝を狙うマニアの犯行と見た（同30日『読売新聞』）が、故人が禁断の場所に財宝を隠したと疑い敢えて破壊した暴挙は、此の五台山の逸話と通じる。今次の出来事が興味を引くのは、第1、毛沢東、蒋介石の彫像が大陸と台湾で続々と撤去されたのに対して、65～86年に独裁者として君臨したマルクスの像が尚健在でいた点だ。在任中に礼讃の為に整備された其の「マルクス公園」が首都でなく、北部のルソン島に在る事も、中国流の神格化から観れば奇異に思われる。ほぼ同時期に独裁者に成った毛とマルクスの接点として、毛が逝去2年前の74年9月に長沙の別荘でマルクス夫人・イメルダ（44歳）と会見した際、相手が西洋式の儀礼で胸の前に差し伸べて来た手を掴んで軽く接吻した、との一幕（顧保孜『紅牆里的瞬間』、解放軍文芸出版社、92年、211～212頁）が思い起される。老人の気紛れや「異性相吸」（性質の異なる電気〔異性同士〕が互いに引き合う。性質が同じの電気〔同性の人間〕が互いに排斥・反撥し合う「同性相斥」の反対）のセックス・アピールを超えて、政治的な同族親近とも思えて来る。
- 34) 魯迅の『悼柔石』（1933年）の第2聯。本稿で用いた日本語訳の訳者・高田淳は、『魯迅詩話』（中公新書、71年）の中で此の七律詩の講釈（65～81頁）に当って、「城頭変幻大王旗」を党内路線闘争に関連付けた竹内実『魯迅と柔石』（69年）の説を引き、67年に訪中した武田泰淳が或る展示の見学の感想として此の句を記した処、郭沫若が「大王」とは劉少奇だと言った事にも触れた。郭を中国の「歌徳」（ゲーテ）と崇める向きも有ったが、此の類の権力を奉迎する「歌徳」（徳政を称揚すること）の所為で、彼は知識人の間で道徳的に評価が低い。彼の風見鶏ぶりや中国語の融通無碍に困り、此の発言は必ずしも劉を貶す物ではないとの取り方も出来ようが、其の真意や魯迅の原義はともあれ、「文革」が国民党時代の内乱や中共早期の内争と三重映しに成った処が示唆的だ。

- 35) 晩年の帰郷の際の墓参り等、毛の孝行に就いては前の系列論考で言及した(夏剛『「儒商・徳治」：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(2)』参照)が、周の孝行で最も印象的な史実は、1942年夏に重慶で手術を受けた後、父親の訃報に接した時に床に崩れ落ちた儘で号泣した事だ。其の体調を配慮して夫人等関係者が暫らく情報を封鎖した事に立腹した彼は、マルクス主義も孝行を否定せず、不忠不孝では共産黨員とは言えないと断じた。『走下聖壇の周恩来』(聖壇から降りた周恩来)等に出た此の逸話は、非凡な彼の常人の一面と中共指導者の「1身2念」を端的に示している。
- 36) 王稼祥が最初に「毛沢東思想」の概念を提起したのは、広く知れ渡った事実である。遵義会議で彼の1票で毛が党首就任への道が開かれた事も、「文革」中に巷の話題と成った。観方に拠れば毛の絶対的な神格性カリスマの固定形象イメージとは微妙にずれるが、僅差で多数を勝ち取った事も大任を与えた天の試練の光環をもたらし得る。王は「文革」中に毛の庇護で無傷で済んだが、旧恩を忘れぬ事が毛の神話の一部と成ったのは、「理治」の中の革命の大義と私情の義理の重層を示唆する。曾ての支持者に対する礼遇は、今後の支持者を釣り出す「利治」の働きをも持つ。其の仁義無き闘いの中の仁義の反面、王の功績を強調する事に由って、毛沢東思想の地位の確立しとに対する劉少奇の貢献を抹殺しようとの魂胆も秘められた。更に突き詰めれば、王の安泰は淑やかな恬淡が幸いし、劉の破滅は戦闘的な激情が禍した処が大きい。
- 因みに、陳伯達も自分こそ「毛沢東思想」の概念の発明権、乃至『毛沢東思想』の初版の著作権を主張した(王光美・劉源等著、吉田富夫・萩野脩二訳『消された国家主席 劉少奇』、NHK出版、2002年[原典=王光美・劉源等著、郭家寬編『你所不知道的劉少奇』、河南人民出版社、02年],30頁)。毛沢東時代以降も引き摺った知的所有権保護の不十分に照らせば意外な感じもするが、「名」の文化の伝統を思い起せば不思議ではない。本稿で引き合いにした「年々歳々花相似、歳々年々人不同」の作者は、名声欲しさで自作にして貰おうと切望した縁戚の官僚に一旦譲った後、後悔し約束を破った故に逆恨みを買って殺されたが、其ほど言説の発明権を巡る執念は凄まじい。名への拘りの様な寂寞に甘んじまい性格も、陳が毛の不興を招き失脚に至った一因と見て能い。
- 37) 原非・張慶編著『毛沢東入主中南海』、中国文史出版社、1996年、380頁。
- 38) 夏剛『「了却天下事・贏得身後名」「只争朝夕・常懷千歲憂」：指導者の自意識と強迫観念()』参照。猶、註36文献の記述では、抗日戦争勝利後に勢力圏を国民党に譲りながらぬ中共中央東北局指導者の心理は、口に銜えた「肥肉」を吐きたがらなかったと言う風に表現された(46頁)。
- 39) 王健民『江沢民全退決策過程内幕』に拠ると、江は普段ほぼ肉を食べず粥を毎食食べており、中南海小食堂で友人を招待する時も「炒花菜」(カリフラワーの炒め物)や、「豆腐肉末」(豆腐にミンチの炒め物)等を好く注文する(香港『亜洲週刊』2002年11月18-24日号、29頁)。周恩来と蒋介石の粥好きは証言が多数有る(程華編著『周恩来和他的秘書們』、294頁;何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』、華文出版社、1999年、下549-551頁)が、毛に関する証言には肉好きの話が多い反面、粥好きの話は見当たらない。晩年の蒋介石が朝食も夕食も粥を食べた、「晚上吃少」(晩は少食)や「八分飽」(腹8分)の格言に基づく養生の他に、齒が好くない事も要因と思える。胡耀邦時代の文化相を務めた小説家・王蒙は、天安門事件後に辞任した'89年に短篇・『堅硬的稀粥』(硬いお粥)を発表し、老人治国や家長制への諷刺と取られ体制側の非難を招いた。「反右派運動」で毛の批判を招いた彼の筆禍の再来とも言えるが、作品の意図は案外為政者への皮肉なのかも知れない。彼に対する批判は如何にも針小棒大で滑稽な印象も受けたが、

粥好きの江沢民と「右派分子」出身の朱鎔基が鄧以後の時代の体制を担ったのは、指導部の高齢化+指導者の淡泊化、及び「脱毛」(毛沢東の呪縛からの脱出)の進展を象徴する事象だ。

- 40) 後藤多聞『二つの故宮』(NHK出版, 99年)第10章・『朕は中華帝国の覇者なり 康熙と雍正と乾隆と清朝皇帝たちの「正大光明」の時代』の第9節の題・「黄河を制する者は中華を制す」は、「治(制)水者治(制)天下」(水を治す[制す]者は天下を治す[制す])と共に、今も官民に脳裡に根付いている古来の常識だ。50年代後期に水利電力省次官在任中に毛の秘書を兼任した李銳は曰く、黄河の治水は長江よりも遥かに緊急性が高く重要度も強く、中華民族の生存は何時の時代にも治水と深く関わっており、治水事業は大禹以来絶えず史書に現われて来ている(戴晴編、鷺見一夫・胡曄 婷訳『三峡ダム 建設の是非を巡る論争』, 築地書館, 96年[原典=『長江! 長江! 三峡工程論争』, 89年, 貴州人民出版社; “Yangtze! Yangtze! Debate Over the Three Gorges Project”, 1994], 194頁)。
- 41) 1~2年来屢々新聞に踊り出ている「ガバナンス」(governance)は、『広辞苑』第5版(1999年)を含めて、多くの日本語辞書には項目として出ていない。其の代りに『大辞泉 増補・新装版』(松村明監修, 小学館「大辞泉」編集部編, 98年)や、講談社カラー版『日本語大辞典』第2版(梅村忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修, 講談社, 95年)には、「ガバナビリティー(governability) 国民が自主的に統治されうる能力。被統治能力。統治能力。統率力。日本での誤った用法」と有る。被統治能力を統治能力として誤用するとは、如何にも統治理論や外来概念が曖昧に成りがちな日本らしいが、『広辞苑』には此の語彙さえ無いので、統治文化論の市場の規模拡張の困難さを感じて成らない。
- 42) 「ガバナンス」の訳語の「統治」に対する日本人の違和感を聞いて、中国の或る大学教授が「治理」を考え付いたが、折角の案も日本では定着しそうにない、との話を此の間の日本の全国紙のコラムで読んだ。中国では30年前の「文革」中の「内部発行」の『日語外来語新辞典』(「日語外来語新辞典」編輯組編, 商務印書館, 73年)には、「ガバナンス」の項(151頁)が有り、其の「統治、支配」の訳も定着して来たが、「治理」の代案は感心させられる。「治理」が日本語に無いのは、語義や語感よりも馴染み度の低さが大きいと思う。本稿筆者は『日本の中空・「頂空」(頂点の空虚)と中国的「中控・頂控」(中心・頂点に由る支配) 日本礼法入門 を手掛りとする両国の言説・観念の比較(1~3)』(『立命館言語文化研究』13巻2~4号, 01~02年)で、中国の多くの抽象語彙が日本で受容されぬ「文化溝」を論じたが、連載2回目では『漢書・趙広漢伝』が出典の「治理」の語義、及び「智力・致力・至理」との同音や治世の文脈に繋がる接点を取り上げた(同3号, 186頁)。
- 猶, 02年後半以来、意味不明の外来語を漢語で対応する動きが俄かに高まって来た。『日本経済新聞』03年1月29日第1版の見出し『ソニー 米国型統治に』等、「統治」も定着しつつある様だ。
- 43) 『水調歌頭・遊泳』(1956年6月): 「更立西江石壁, 截断巫山雲雨, 高峽出平湖。神女應無恙, 当驚世界殊。」(更に西のかた江に石の壁を立て、巫山の雲雨截ち断りて、高き峽に平なる湖を出せ。神女 應恙無からんも、当に世界の殊なれるを驚くべし。竹内実訳。『毛沢東 その詩歌と人生』, 289頁)。
- 44) 中国人が決断の時に此の熟語を使う例は多数有る。毛はニクソンに対して、民主党よりも共和党が好きで、前回の大統領選挙では私は貴方に一票を入れましたよと言い、ニクソンは、「2人の悪玉の内、より悪くない方に投票したわけですね」と応えた(引用符の中の訳は、R・ニクソン

著, 松尾文夫・斎田一路訳『ニクソン回顧録第1部 栄光の日々』, 小学館, 1978年[原典 = NIXON'S MEMOIRS, 1978], 329頁)が, 其の返事は中国流で「両害之中取其輕」と訳された(陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』, 昆侖出版社, 88年, 292頁。猶, 産経新聞「毛沢東秘録」取材班編著『毛沢東秘録』では, 此の文献を解放軍文芸出版社'97年版とした[下, 108頁]が, 初版は其の9年前のはず)。

- 46) 柏楊の「醬缸文化」説は有名過ぎるが, 其の文筆活動を時系列で振り返れば, 大陸との「同步」(同時進行)性が目に付く。彼は51年(31歳)に小説の執筆を始め, 59年に青年反共救国団を退職し『自立晩報』副刊編集者に成り, 60年以降は『倚窓閑話』『西窓隨筆』等の隨筆を発表し, 体制への批判で68年の投獄を招いたが, 其の年に武闘が頂点に達した「文革」の最初の「文字獄」にも, 60年代前半の雜文『燕山夜話』『三家村札記』が有る。前者は北京市党委員会書記・鄧拓が「馬南邨」の筆名で61年3月~翌年9月に, 『北京晩報』(夕刊紙)に連載した153編で, 後者は鄧拓・吳晗(北京市副市長, 作家)・廖沫沙(北京市党委員会統一戦線工作部長)の交替執筆に由り, 吳晗・「馬南邨」(鄧拓)・「繁星」(廖沫沙の筆名)から1字取った筆名・「吳南星」で, 61年10月~64年7月に北京市党委員会機関誌・『前線』(編集長 = 鄧拓)に連載した67編だ。「文革」の批判で鄧拓と吳晗は自殺か「非正常死亡」を強いられたが, 本名・郭衣洞の柏楊の別の筆名・「鄧克保」を連想すれば暗合を感じる。雜文の諷諭に対する当局の敏感は魯迅に対する国民党の態度と一緒だが, 一連の問題作が北京市党委員会機関誌に一種のおまけとして掲載されていた事は, 毛がいう「党内有派」(党内に派閥有り)の実態を思わせ, 毛も好んだ「副刊」(注8参照)の利用価値の高さを窺わせる。柏楊は77年に出獄した後に執筆を再開し, 85年の『醜陋的中国人』や89年の『家園』(『醜い中国人』『絶望の中国人』)の題で日本語訳有り[張宗澤・宗像隆幸訳, 光文社]で, 政治・社会の弊害の根源として国民性への批判を展開したが, 同じ頃の大陸でも民族文化の根を尋ねる文学運動の反面, 国民性への「反思」(反省)の機運が思想界で高まり, 代表作の『河殤』(後述)の矛先は巡り巡って, 柏楊の故郷も含む黄河流域の文化伝統を指したのである。
- 47) 「五色絢爛, 漸老漸淡」は蘇軾の文学に対する古人の評語。「東坡肉」は蘇が任官先の杭州で考案したと伝えられるが, 地上の天国と言われる蘇(州)・杭(州)の対(夏剛『「儒商・徳治」の道: 理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(3)』註149参照)は, 西湖の整備を進め蘇堤の形成と名称の由来に成った蘇軾と杭州の対とも絡む。
- 48) 『七律・為李進同志題所攝廬山仙人洞照』: 「暮色蒼茫看勁松, 乱雲飛渡仍從容。天生一個仙人洞, 無限風光在險峰。」
- 49) 政治的な「寛松」への要請の高まりは, 80年代中期の事である。胡錦濤の前任に当る貴州省党第1書記を僅か4カ月担当後, 85年に党中央宣伝部長に抜擢された朱沢厚の87年の失脚は, 其に共鳴した姿勢も一因である。江沢民体制発足後の89年末に, 朱は中華全国総工会(労働組合)副主席兼党第1書記を解任され, 以後も活躍の場が与えられなかったが, 鄧小平時代との連続性を窺わせる浮沈だった。猶, 緩やかな自由化を唱え鄧小平時代の思想界の「4大領袖」の1人・李沢厚(美学家・哲学者・中国思想史研究家)との同名は, 毛沢東・江沢民の名に即した本稿の命名選好論の例証に成る。
- 50) 「鳥籠」統治は「鳥籠」經濟^{モジ}を擬った筆者の造語。中共の長年の經濟運営責任者・陳雲は'82年末, 「鳥籠」の比喻を以て經濟に一定の制限と適度な自由を与えるよう唱えた。其の計画(管理)經濟+市場經濟も, 「鳥籠」統治の一環と見て能い。

- 51) 毛は 66年7月8日に江青宛ての書簡で「文革」発動の決意を述べ、「天下大乱，達到天下大治」（天下大乱は，天下が大いに治るに到る）との青写真も描いた。
- 52) 晁峰・明軍主編『毛沢東之謎』，87頁。
- 53) 王健民『江沢民全退策過程内幕』。
- 54) 劉再復・林崗は『伝統与中国人 關於「五四」新文化運動若干基本主題の再反省与再批評』（三聯書店，88年）の中で、『爾雅』の此の解釈を手掛りに儒教の倫理を分析した（278頁）。蒋介石は長男に対する帝王学の基礎として，其の10歳代前半に『説文解字』と『爾雅』を読ませた（江南著，川上奈穂訳『蔣経国伝』，同成社，89年〔原典＝84年〕，12頁）。天安門事件前の思想界「4大領袖」の1人・劉が共著し，蔣経国逝去の88年に刊行した近代思想・伝統文化への反省の中に，『爾雅』の字解が登場したのは，文化と統治の相関を示唆している。
- 55) 『国語・晋語八』：「上医医国，其次疾人。」猶，同章の「言立於後世，此之謂死而不朽」の故事は，『左伝』にも出ており，本稿筆者の『現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熱読」「迎接新千年」盛典を巡る首脳と「喉舌」の2重奏と其の底流の謎解き』の切り口と成った。
- 56) 『理顺物価，加速改革』（1988年5月19日）は，『鄧小平文選』第3巻所収，263～264頁。
- 57) 筆者の独自の字解の多くは言語学の正道から外れているが，『日本の中空・「頂空」（頂点の空虚）と中国的「中控・頂控」（中心・頂点に由る支配）「日本礼法入門」を手掛りとする両国の言語・観念の一比較（1～3）』等で既に実験し，今後の関連論考で改めて動機を開陳し仮説を展開して行く様に，恣意性を自戒しつつも敢えて新たな切り口を求めたいわけだ。
- 58) 『広辞苑』。猶，同辞書の「維管束」の語釈は，「シダ植物と種子植物とにある重要な組織。茎・葉・根などを糸束状に貫いている。篩部と木部とから成り，篩部は同化物質その他体内物質の通路，木部は水の上昇路。」
- 59) 蒋介石は西安事変の22年余り後の59年頃，張学良が自由を回復した事を口頭で告げたが，張は75年の蔣の葬儀や79年の建国記念日に参列したものの，始めて堂々と公の場に出たのは90年6月1日，数え歳90歳の公開誕生会である。名誉回復を意味する其の集いには，行政院長経験者・張群や行政院長・郝柏村等が出席した。（文献多数。日本語文献の一例は，古野直也『張家3代の興亡 孝文・作霖・学良の「見果てぬ夢」』，芙蓉書房，99年，248～251頁）
- 蒋介石より1歳年下（1888年生まれ）の張群は，6ヵ月後101歳で逝去した。共に2001年に全うした張学良と陳立夫の天寿も，其々100歳と101歳に上った。陳は蔣の親友で大陸時代の国を牛耳る蔣・宋・孔・陳「4大家族」の1員だが，陳と同じ1901年生まれの宋家の宋美齡は今も存命中である。健康法や達観で長寿を保つ中国人の生に対する執念の強さ，及び体を保つ心・技の充実さは，実に驚嘆すべきである（海峡兩岸の指導者の生き方・在り方と絡んで，後に詳述）。
- 古野直也と共に最晩年の張学良を訪ねた西村成雄（大阪外国語大学教授）は，『張学良 日中の覇権と「満州」』（岩波書店，96年）の中の「張学良数え90歳の公開誕生会」の件で，「主催者の103歳に成る国民党元老の張群」と記した（252頁）。両方とも数え歳との前提だから理に適うが，現代中国研究所編『中国年鑑2002』（創土社，02年）の01年年表では，「2月7日 蒋介石の元側近，陳立夫，台中で死去（103）」（28頁）と，「10月14日 “西安事変”の主役，張学良死去（100）」（44頁）との間に，享年の計算基準の齟齬が見られる。
- 日本的な緻密さを生かせなかった左様な混乱は，元を糾せば中国的な「1人2齡」制の所為である。本稿筆者は本籍地と出身地の使い分けから中国人の帰属意識と自己主張を探った（『「儒

商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(3)』註153参照)が、「虚歳」(数え歳)の水増しで虚勢を造る習性と合わせて、自己規定の時空軸の虚実の重層を後に掘り下げたい。

猶、筆者は「求实」(真実を求める)、「实事求是」(事実から真理を求める)の精神から、論考対象の年齢を「実歳」(満年齢)で統一している。例えば、雍正帝(1678～1735)の享年は、58歳と記す文献も散見される(後藤多聞『ふたつの故宮』[下], 305頁)が、本稿註29の記述では57歳とした。

- 60) 64年12月15日～翌年1月14日の全国工作会議(党中央が招集し、農村社会主義教育運動が主な議題)で、毛は劉に対して何度も不満を爆発させた。鄧が一般的な意見交換・総括の会議と考えて、毛主席は体が好かないから出席しなくても構わないと言った事も、毛の激怒を招いた。彼は劉と政策を巡って論争した後、片手に『党章』(党規約)を持ち片手に『憲法』を持って、会場に着くなり自分に対する2人の「封殺」を非難した。一方、劉・鄧打倒を呼び掛ける毛の『砲打司令部 我的一張大字報』(司令部を砲撃せよ 私の壁新聞)が、1周年の67年8月5日に公表されたのに合わせて、劉は中南海内の「批闘」(吊るし上げ)大会に引き摺りだされたが、執務室に戻ると『憲法』を取り出し、国家主席の尊厳と公民の権利を主張し、自分はまだ罷免されておらず解職は全人代の議決が必要で、憲法を破った者は厳罰を受ける事に成るぞ、と怒鳴った。(王光美・劉源等『消された国家主席・劉少奇』, 260, 70～71頁)

何れも有名な史実であるが、本稿の「2主席」対「1主席」の観方に即して吟味すれば、党規約・国家憲法を両手に持った毛に対して、片方しか持たぬ劉の「不平則鳴」(不平を覚えれば大声で叫ぶ)の抗議が空しく響いたのは、孤立無援を形容する「孤掌難鳴」(片手では[もう一方の手の呼応が無い故に拍手できず]音を立てられぬ)の通りだ。一方の毛は「左右開弓」(両面から進撃する譬え)、「左右逢源」(方々から応援を得る)の観が有った。因みに、「不平則鳴」「孤掌難鳴」「左右逢源」は其々、韓愈の『送孟東野序』、『韓非子・功名』、『孟子・離婁下』が出典である。

- 61) 註60と同じ場面で毛は劉に対して、「君は何様なにさまと思っているのだ。儂わしが小指1本動かせば、君を打倒できるのだぞ！」と勃然と怒った(王光美・劉源等『消された国家主席・劉少奇』, 260頁)。多くの要人に目撃された此の光景と暴言は、毛の独裁ぶりを端的に露呈しているが、実際に其の権勢が有るだけに恐ろしい。石炭部や冶全部など何処が「資本主義の道を歩む実権派」なのかと劉が質すと、彼は即座に張霖之(石炭工業相)を名指した(257～258頁)が、「文革」で造反派の虐待で真っ先に命を落とした大臣が他ならぬ其の男だ。劉が其の場で詰問を止めたのは、殺気を嗅ぎ取り他の幹部に累が及ぶ事を恐れた所以である。猶、註60の憲法と註73の最高会議に絡むが、憲法の規定で国家主席が召集する最高國務會議は、党指導部の決定の追認・発表の機能しか持たず、毛の国家主席辞任後も彼の言い放題の場であった。64年12月30日を最後に其の虚飾の活動さえ停止した(天児慧等編『岩波 現代中国事典』, 392頁)のは、「人治」に因る劉の衰微の証と思える。因みに、国・共の同根性を象徴する様に、此の機構の名称と性質は蒋介石政権の最高國務會議に原型が在る。

- 62) 『ニクソン回顧録』(註44参照)を始め、米国側文献の日本語訳はほぼ全て此の「委員長」を「総統」としているが、建国後の中共は国民党政権を台湾省の地方政府としか容認しないので、左様な呼び方は西側の思い込みで因る物か。我々と蒋介石の付き合いは貴方たちとの付き合いより長い、と言った毛の言葉は其の辺の理解の深浅にも当て嵌まる。

63) 多数の中国側文献を駆使した吉田荘人の『蒋介石秘話』(かもがわ出版, 01年)の記述では, 48年に蔣の意に反して副総統に当選した李宗仁が, 正・副総統就任式の前に式典の服装に就いて蔣の指示を仰いだ処, 洋装礼服の着用を言われた。李は民族衣装好きの蔣らしくないと訝りながら, シルクハットと燕尾服1式を誂えたが, 前日の夕方に軍服への変更を命じられた。其の通り式典に臨むと, 数百の文武官員も外国の使節も礼服姿で, 蔣は民族衣装を着け, 李だけが軍服姿で厳肅な式典には調和せず孤立してしまつた。李は内心蔣を恐ろしく思ったが, 列席者は彼が姦計に嵌められた事を知る由も無かつた。(148~149頁)

同書には出ていないが, 中国人にとって此の一齣のミソは, 軍服姿に因って李が蔣を護衛するイメージが付いた処に在る。何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』(華文出版社, 99年)では, 「軍便服」を着用させられた李は恰も蔣に附随する「大副官」の様で恰好が悪かつた, と言つた(30頁)。「好男不当兵, 好鉄不打釘」(好い男は兵隊に成らず, 好い鉄は釘にしない)と言う大衆の価値観は, 鉄砲(軍隊)を政権の生みの親として尊ぶ中共政権の誕生までは根強く有つた。蔣の指示は吉田文献では2回とも侍従経由の伝言で, 何文献では2回目は「手諭」(指示メモ)を出したとするが, 二転三転して李を翻弄した小細工は, 蔣の狡猾い政治手法を端的に顕わしている。彼の脳味噌は此の手の暗闘で相当消耗されたから, 日本軍にも共産党にも負けたわけだ。

蔣の民族衣装好きや, 洋装・軍服に対する当時の民族衣装の優位を浮き彫りにした点でも, 此の逸話は興味深い。蔣は夫人に従ってキリスト教に帰依し, 国民党は共産党より西洋化を奨励したが, 大陸時代の末期にも元首の洋装着用が珍しかつたのは, 中共と同じ土着性を思わせる(因みに, 台湾時代でも少なくとも54年5月20日の「総統」就任式では「藍袍黒馬褂大礼服」を着た[何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』, 652頁]。恰度半世紀後の98年, 江沢民主席が民族服装を着て天皇主催の晩餐会に臨んだ事は, 日本で一部非難を招いたが, 民族衣装を正装とする同時代中国の観念や, 日本側が要請した洋式礼服の着用が未だに大陸の対内・対外の典禮で馴染まれていない実情を斟酌すれば, 政治・文化両面の誤解と言わざるを得ない。

猶, 件の式典は48年5月20日に行なわれたが, 本稿で取り上げた台湾民主化示威の要請回答の締め切りの90年5月20日も「総統」就任式の日で, 00年の陳水扁「総統」就任も同じ日であつた。本稿筆者は『中国, 中華民族, 中国人の国家観念・民族意識・国民自覚』(中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在 その理論と実証の試み』[晃洋社, '03年]所収)で, 国民党と民進党の隠れた同根性, 世界の変易の中の中華の不易を論じたが, 其の式典の日が数十年1日の如く守られて来た事は, 時計並みの律儀さを以て其の裏付けと成る。

本稿では同じ5月20日で結ばれる台湾・北京の戒嚴令の接点に着目したが, 『現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熱読」 「迎接新千年」盛典を巡る首脳と「喉舌」の2重奏と其の底流の謎解き』の冒頭で引き合いに出した「副統帥」・林彪の失態は, 70年の50万人大衆集会で毛の『5・20声明』を読み上げた際の出来事だ。盛典に於ける蔣と毛(註64参照)の服装の演出は, 正に統治・祭祀の「表演」(パフォーマンス)であるが, 因縁の日が歴史の連環を成し得る事は, 本稿も含めて筆者が近年来の論考で再三検証して来た。因みに, 陳水扁「総統」就任の干支の1小巡り前の88年5月20日, 民進党の陣頭指揮で台湾各地の農民数千人が台北で利益保障の為の請願をし, 立法院構内での小便を拒否された事から当局と衝突し, 負傷・逮捕者が多数出た。柏楊の『家園』(日本語版題 = 『絶望の中国人』, 註46参照)の刊行日は其の流血事件の丸1年後, 奇しくも北京戒嚴令発動の日とぶつかつた。

64) 毛は朝7時半に始まる紅衛兵百万人集会の前日の深夜, 「軍装を着る」と突然言い出したが, 大

柄で恰幅の好い彼に合う軍服は手近には無く、軍の総後勤（軍需）部の担当者も不在だったので、毛の体形に似た中央警備部隊の中隊幹部の物を取り寄せ、毛は早速試着し気に入った（産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』上、175頁。原典＝陳長江等『毛沢東の最後10年』、中共中央党校出版社、98年）

此の逸話の興味深い処として、次の数点が挙げられる。「衣食住行（交通・行動）」に於ける冒頭の位置の通り、服装は象徴的な重要性を持つ；軍服は「文革」中の毛の神格化に画龍点睛の役割を果たした；裏を返せば、建国後の毛に軍服着用の習慣が無かった；調達の経緯は毛の体躯の大きさを裏付けた；他者の物の借用に無頓着な処は毛の鷹揚さと共に、服装を記号として割り切った感覚にも因らう。

- 65) 81年4月、『解放軍報』に映画脚本・『苦恋』(白樺・彭寧、79年)を批判する「特約評論員」の論文が掲載され、間も無く『紅旗』『人民日報』も追随した。上層部の背景を仰々しく仄めかす署名も、軍部が口火を切って党の「喉舌」が参戦した処も、映画を「思想闘争」の突破口にした手法も、毛沢東時代の名残りを感ぜさせた。何しろ毛自身も左様な覆面論評を書いた事が有り、「文革」中の『人民日報』第1版の真上に毎日載った「最高指示」は軍総政治部編『毛主席語録』が元祖であり、「文革」の前哨戦には「林彪同志が江青同志に委託して開催した部隊文芸工作座談会」(66年2月)が有り、「文革」初期の「三家村」批判(註46参照)の第1弾、66年5月8日『解放軍報』に掲載された『向反党反社会主義黒線開砲』(反党反社会主義の黒い線を砲撃する)であった。署名の「高炬」は「高拳」(高く掲げる)の語呂合わせで、実質的な筆者は江青と其の側近なのだが、建国後の「文芸戦線」の最初の肅清運動は、恰度30年前の51年2月に、党中央宣伝部映画処(科)副処長・政務院映画指導委員会委員の江青が仕掛け夫君の威勢を借りた映画・『武訓伝』の批判だ。

尤も、軍部の媒体が論陣を張ったのは、当時白樺が軍の専属作家であった事にも因る。曾て賀龍に近かった白は昆明軍区在籍中「右派分子」として党籍・軍籍が剥奪された後、やがて復活し武漢軍区に移り、「文革」後期に胡耀邦の別働隊として反江青の秘密活動に携ったが、軍人作家に由って「反4項基本原則」の問題作が創られたのは、政府「智库」の中国社会科学院のマルクス・レーニン主義研究所所長・蘇紹智が「異端」言動の為、87年の「反資産階級自由化」で所長解任・党籍剥奪の処分を受けた事と同じく、共産党支配が一枚岩でない実態を象徴している。

猶、同年暮れに白樺の『解放軍報』『文芸報』宛ての公開状で自己批判を行なった形で一件落着と成った。秋の党大会での胡耀邦の党首就任を妨害する意図が批判の裏に有った、等の憶測が飛び交ったが、各方面の妥協には練達の平衡感覚が見て取れる。本稿筆者は其の数年後、胡耀邦の応援の下で『大地の子』の取材を進める小説家・山崎豊子の随行通訳として、筆禍後間も無く上海作家協会に移籍した白の自宅への訪問をお供したが、良心を曲げる事無く且つ無難な表現で微妙な質問を躲した其の対応には、感銘を受けると同時に其の世代(白は1931年生まれ、建国時に恰度成人に成った)の一典型を観た。

『苦恋』は長春映画製作所に由り『太陽与人』(太陽と人間)の題で映画化したが、公開禁止につき幻の作品と成った。胡耀邦失脚前に関係部門の好意と上層部の決裁で山崎豊子の特別観覧が許可され、筆者は北京某所のがらんとした小ホールで同時通訳に当たった。鄧や軍部の不興を買った割には余り煽動力を感じず拍子抜けした。尤も、当事者の信条・心情・立場を考慮すれば、針小棒大の過剰反応とも思わない。特に槍玉に上がった2カ所 代々の大衆拝観のお香の煙で黒く成った仏像と「人」の字形を成して飛ぶ雁の群れは、本稿で論じた毛沢東時代の「造神」

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」⁽¹⁾（夏）

（註32参照）、「文革」後の人道主義の台頭、及び内外の雁行型発展への移行と結び付けば、^{いま}未だに今日的な意味を持っている。新中国を慕って海外から帰国した画家が「文革」中迫害を受け、76年の天安門事件後に国内逃亡を強いられるとの物語は、第2次天安門事件後の反体制知識人の国外亡命と比べれば、毛沢東時代と鄧小平時代の反転が見て取れる。

- 67) 余太君は『辞海』で単独の項が有り、次の様に解説されている。『楊家将』の中の人物で、北宋の名将・楊繼栄の妻。韜略に精通。其の8人の子供と1人の孫は多く国に殉じた。西夏の侵犯に対して、百歳の高齢を以て元帥の印を携帯し、楊家12人の寡婦を率いて西部を征伐し、楊家将の愛国精神を集中的に体現した。一老婦人でありながら高度の威望（威信・人望）を持つとは、古典文学の中の稀に見る人物である。」

人口に膾炙する『楊家将』の物語には、余太君の訓示を拜聴し服従する場面が好く出る。本稿筆者は『中国、中華民族、中国人の国家観念・民族意識・国民自覚』や、『中国的な国家・民族自覚を巡って（上・中）』（『立命館言語文化研究』11巻4号、12巻2号、00年）の中で、老母の命に拠って親への孝より国・主への忠を一層自覚した岳飛や徐庶の物語を例に、中国に於ける家の国に勝る重みを論じたが、其の英雄・賢人の恭順は此処で母権の強さや陰・柔の究極の優位を示唆する。猶、曾て日本の軍人は占領下の中国人から「太君」と呼ばれた。漢奸が敬虔に勘案した尊称なのか民衆の不本意な奉迎なのか不明だが、「余太君」や『西遊記』の「太上老君」とどぶる大変な立て方なのだ。其の神聖なる呼び名も殆ど真正の気持ちを伴わなかったので、「名」の文化」の反面の「「仮名」の制度」に気付かされる。

- 68) 朱建栄『毛沢東のベトナム戦争 中国外交の大転換と文化大革命の起源』（東京大学出版会、2001年）には、李志綏『毛沢東の私生活』、陳晋『毛沢東之魂』（吉林人民出版社、93年）、中共中央文献研究室編『建国以来毛沢東文稿』第6巻に基づいた経緯の記述が有る（118頁。出所註は147頁）。毛は西北地域を考察する為に北京西山と北戴河で騎馬の訓練を受け写真も撮り、内蒙古・寧夏から馬の調達が進み、歴史学者・地質学者・土木建築学者の同行も決まったが、米軍が越南戦争に直接介入したとの急報が64年8月5日に入った事で、10日の出発予定は急遽取り消された、と言う。

戦争中の毛は好く一身の安危を顧みぬ我が儘な行動を取ったが、建国後^{きすが}流石に出来なく成った事は天下取りと政権維持の違いを思わせる。「老夫聊發少年狂。左牽黃，右擎蒼，（略）千騎卷平岡。親射虎，看孫郎。酒酣胸胆尚開張。鬢微霜，又何妨！（略）會挽雕弓如滿月，西北望，射天狼。」蘇軾の『江城子・密州出獵』の此の情景を連想させる彼の夢は幻と成ったが、2年後の同じ8月5日に『砲打司令部』の号令（註60参照）で「老夫」の「少年狂」を見せたのは、一種の代償行為なのかも知れない。一方、「文革」は「老夫」・毛が煽てた造反派の「少年狂」とも言えよう。本稿の論考と結び付けて考えれば、西北・地質学者・騎馬と温家宝の勤務地・専門・特技と重なる事（後述）も意味深長だ。

上記の朱建栄著書には、李志綏『毛沢東の私生活』も含めて一部の文献に就いて「邦訳」の記し方が成されているが、本稿筆者も曾て『「文革」後の中国文学と日本の戦後文学 相互参照の試み』（岩波書店『文学』89年3月号）の原稿で「邦訳有り」と書いた処、「邦訳」は本邦訳の意なので記述者が中国人である場合は不適切だ、と校閲者の竹内実先生から指摘され、以来ずっと「日本語訳」として来た。朱氏の好著に難癖を付ける^{うもつ}心算は全く無いが、思考・表現の盲点として触れて置きたい。

- 69) 若林正文『蔣経国と李登輝 「大陸国家」からの離陸？』、岩波書店、97年、198頁。

- 70) 何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』の第13章(683~746頁)の題。鄧小平時代では懐柔策として蒋介石を「蒋先生」で呼ぶ場合が多く成ったが、其の尊称が「先死」(先に死ぬ)の揶揄と表裏一体と成り得るのは、中国語と中国的な思考の恐さである。蒋介石とフルシチョフの逝去を伝えた『人民日報』の報道は、「~死了」(~死んだ)と言う嫌味の見出しを付けた。敵対心理を映した素直な表現と言えるが、些か大人の風格に欠ける。中国語の「逝世」(逝去),「去世」(他界)に比べて、日本流の「死去」も粗雑な語感がするが、せめて「死去」ぐらいを使った方が宜しかろう。尤も、蒋介石を語呂合わせで「蒋該死」(「該死」=死ぬべし)と呪う毛沢東時代の感覚に比べれば、「死了」は寧ろ遠慮の部類に入るのだ。
- 71) 司馬遼太郎は亜細亜の「4頭の竜」の先頭を導く日本を「親竜」と表わした(『儒教三千年』,朝日新聞社,92年,213頁)が、ソ共の「老子党」(親父党)気取りに対する毛沢東の反撥が示した通り、中国人の民族自尊心は此の「親」を受け付け難い物だ。本稿筆者は雌伏雄飛の過程を思い浮かべる「昇龍」か「騰竜」を好むが、日本の牽引役をより鮮明に出す比喻として、「頭雁」か「頭龍」が好かろう。雁の群れの引率役を言う前者は亜細亜経済発展の雁行型様式にぴったり合い、「頭羊」(ボス羊)を擬った後者は字面で日本の竜頭蛇尾(中国流では「虎頭蛇尾」と重なり、其々妙味が有る。
- 72) 戦争中まだ日本軍に占領されなかった頃の香港や日本占領下の上海の中の西洋列強の租界は、孤立と安全・繁栄の両義で「孤島」と呼ばれた。「孤城」は「4小龍」の植民地体験(註75参照)に繋がる其の形容と、王之涣の「黄河遠上白雲間,一片孤城万仞山」とをだぶらせた表現である。唐の辺塞詩の最高傑作に入る此の『涼州詞』は、最初の句は本稿の黄河「治理」の文脈と関わり、後半の「羌笛何須怨楊柳,春風不度玉門關」は、玉門關以西の甘肅の黄河流域水利発電所建設現場で長年辛抱した胡錦濤の経歴と重なる。
- 宮崎正弘の『胡錦濤・中国の新覇権戦略』の政治的な色眼鏡に因る一部の偏頗を感じつつも、次の喝破には共鳴を覚えた。曰く、軍隊経験が皆無で狡智な中国人を知らぬ日本の新しい世代の中国観察家は、米国留学仕込みのデータ偏重の分析法に頼り、人間性の読解を疎かにし全体像を見誤りがちである(72~73頁)。曰く、日本の中国報道は経済関係に偏り、而も繁栄の片側は報じても暗部を詳細に凝視する態度は乏しく、漢字文化の利点を生かしていない;日本人が中国を誤解する要因は儒教や漢字の他に、唐詩の優雅・雄大・浪漫も有るが、現代中国には日本的な甘い情緒は通用しない(248~249頁)。
- 比較文学から出発し比較文化に研究基盤を移した本稿筆者は、両国の政治・社会や思考・行動原理を比較し、日本人の中国観や言説全般に接する際に、漢字・漢籍との本質的な「文化溝」を痛感せずにはいられない。詩歌とは別世界の生臭い・血腥い現実や、其の現実を反映した唐詩の中の「悲涼」(悲愴・凄愴)の一面に目を向ければ、安易に唐詩の形式美の虜に成ってう心理は、断層の彼岸の部外者の片思いとしか思えない。戦乱を背景にした辺塞詩が日本で馴染み難いのも其の証だが、宮崎が魔力の例示に挙げた「国破山河在,城春草木深」自体は、典雅や優美には程遠い血と涙に由る悲壮な滅亡の表現であり、皮相な感情移入を拒絶する物である。
- 73) 「トロツキスト分子・国民党特務・反党集団頭目」の罪名で、47年3月に41歳の王実味が銃殺されたのは、中共が文学者に処した極刑の例外である。戴晴は報告文学・『王実味と「野の百合花」』(88年。田畑佐和子訳『毛沢東と中国知識人 延安整風から反右派闘争へ』[東方書店,90年]所収,7~92頁)の中で、其の不当批判・逮捕・処刑の全容を容赦無く暴いたが、本稿の論考範囲に関連する次の諸点に注目したい。処刑を知った毛は激昂の余り弁償して還せと言ひ、建国

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」(1)（夏）

後も此の事を何度も蒸し返し、当初の党中央社会部長・李克農を酷く落ち込ませ其の若死（享年63）を誘発した。戦時下の非常事態という弁解の余地が有りながら、最終決裁者と見られる賀龍は責任を認めず毛も彼を咎めなかった。王を監禁に追い込んだ契機は他ならぬ毛の批判で、彼は王の名誉回復を謀らぬばかりでなく、李克農が脳溢血で急逝した62年（戴が記した没年の「50年代末期」は憶え違い）、最高会議で王の「毒草」（有害な作品）を挙げて王への非難を繰り返した。王の名誉回復は死後45年も経ち、延安時代の柵が漸く崩れた江沢民時代の92年に漸く実現された。

後の2点は中共の長年の「人治」主義、加害者でありながら謝罪せぬ体質、「算歴史旧帳」（旧い勘定を清算する。昔の事を蒸し返して追究する。積年の怨念を晴らす）の習性を現わしたが、被害者・弱者が謝罪を拒む事の危険性も此の事例で思い知らされた。戴晴は王の死の要因を保身術が欠如した初心さにも求めたが、多くの知識人が毛沢東の独裁に屈したのは、其の鑑を思い出せば合理的な行動と言えよう。一方、周恩来の下で情報部門を長年司った李も、上命に忠誠を尽くす純粹さの故に身を全うし得なかった。反面、王の処刑 毛の憤怒 李の悶死という負の連鎖は、皮肉にも悲劇の再演の歯止めと成った。

「文革」中の張春橋は、銃殺しない事が巴金に対する寛大な待遇だと講演で言った（巴金『一封封信』、77年。『講真話の書』[四川人民出版社、90年]所収、4頁。原文＝「不槍毙就是落實政策」）が、王実味の様な死刑がもはや出来ぬ事の裏付けと思える。尤も、口惜しい虚勢だと理屈で判っていても、極刑を散ら付かせる威嚇は知識人にはやはり効果覲面だった。何しろ「文革」初期に、巴金と同年代で同じく張春橋・江青等の若い頃の暗部を知っていた上海交響楽団指揮者・陸洪恩が、「反革命現行犯」として逮捕され高齢にも拘らず処刑された。（陸の冤罪は日本では報じられていない様で、中国でも「文革」後の暴露には余り見当らなかったが、音楽好きで多感な年頃だった当時の本稿筆者には、強烈な衝撃を与えた。）

註40で挙げた戴晴編の問題作と李銳に絡むが、『三峡ダム 建設の是非を巡っての論争』にも「現行反革命」に纏わる秘話が出ている。『過去4年間（1989～1993年）の経緯』（執筆＝史禾）の記述に拠ると、91年新春、三峡ダム建設の議論が進まぬ状況に苛立った2人の長老指導者83歳の国家副主席・王震と75歳の全国政治協商会議副主席・王任重が、広州で専門家座談会を召集し推進の氣勢を盛り上げようとした。彼等は所管でもないのに、当工程は92年下半期での着工を目指し、今世紀末と来世紀初頭には便益が現われるよう奮闘し、2010年には全部完成する、と言う号令を「紀要」（議事録）に盛り込み、建設急進派の錢正英女史（全国政協副主席。元水利電力相）等を元氣付けた。王震は慎重派の代表格を名指して糾弾し、「三峡工程に反対する李銳は、湖南人の恥曝しであり、反革命の現行犯である！」と放言した。其の評語は議事録には記載されなかったものの、口伝えで北京にまで届いたが、李銳は動ずるところか、「私が反革命の現行犯ですって？其ならば、私を逮捕すれば好いじゃないですか」と平然として述べた。（75頁）

本稿筆者が通常の日本流に従って「反革命の現行犯」と直した処は、中国語版・英語版に基づき日・中の訳者に由る日本語訳では、「現今の反革命」と成っている。王の恫喝は李の応酬から窺われる様に、現行犯逮捕の要件を構成し得るとの含みが有るが、「現今の～」では刑事処罰に直結せず迫力が全然違う。因みに、「概要」と訳された座談会の「紀要」は、中国語では公式会議等の議事録を表わす（注66で触れた「林彪同志委托江青同志召開的部隊文芸工作座談会」の決議に準ずる議事録も、「紀要」の名称を使った。因みに、日本の大学の紀要は中国流で「学報」が普通）。問題の広州座談会の「紀要」を掲載した新華社の『国内動態清様』は、日本語版で原

文の儘と成っているが、日本語に無い「清様」は意識か注解が必要だろう。此の語彙は最終校正を終えた「校様」(校正原稿)に言うので、直訳なら「校了稿」(中国流では「校定稿」)や「校了紙」が考えられる。政策決定の為の情報提供を目的とする此の種の内部発行物には、「未定稿」等の名称も付いたりするが、情報管制の「鳥籠」の「柵」の形態として何れも妙味が有る。

本稿の論旨に即して此の逸話の興味深い点を挙げると、王震の断罪に故郷の名誉が革命の理念より先に出る処が第1注目を引く。自分はマルクス主義者に成る前にも成った後も中国人だ、と言った毛の自己規定にも合致するが、筆者が本稿及び関連の論考で国家指導者の心性の根を出身地域に求めたのは、此の様に当事者の自意識に拠る事である。猶、此の「2王」の家郷の「両湖」(湖南・湖北)は前述・後述の通り、昨今の指導部で「両江」(江蘇・浙江)に優位を譲った。註63で広西軍閥・李宗仁を取り上げたが、鄧小平時代では葉劍英父子や韋国清(広西壮族の出身。1929年に鄧小平と共に広西で蜂起を指揮。建国後 61 75年に広西の長官を務め、73 85年に党中央政治局委員、77 82年に軍総政治部主任、天安門事件の10日後に逝去)等の後退等、「両広」(広東・広西)の衰微も目立った。一方、所管外の土儀に手を伸ばした王震の勇み足は、中国人の最大で最後の厄年 84歳が迫っていた事を思えば、片足が棺桶に懸かった老革命家の最後の闘争とも思える。2010年竣工の目標も、翌年の辛亥革命百周年を意識した浪漫の色彩が濃いのか。

話の落ちである李銳の落ち着きと開き直りは、4世代指導者の「順時針」移行を裏付けている。「文革」の点火が上層部に止まっていた初期に、曾て同じ毛の秘書を務めた先輩の鄧拓と同輩の田家英が相繼いで自殺したが、4半世紀後の堂々たる反応は隔世の観が強い。但し、李の度胸は殉道の気概と言うよりも、危害が及ぶまいと見抜いた冷静な判断であろう。王震は天安門事件の武力鎮圧でも鷹派の面目を露わしたが、自ら開けた「禍匣」(パンドラの箱)から飛び出た劇薬は、鎮圧側の度肝をも抜かせた様である。第1次天安門事件の民兵に由る準武力鎮圧を指揮した華国鋒(首相代理・公安相)と、第2次天安門事件の学生領袖の1人・封從徳の氏名に引っ掛けて言えば、「鋒・封」の対は刃物に由る封殺を経て、返り血を浴びた刃物の「封存」(封印・保存)に至った観が有る。

敢えて本筋から逸れるが、学生の天安門広場防衛指揮部の総指揮・柴玲と3人の副総指揮の1人・封從徳が夫婦であった事は、「文革」中の毛・江「夫妻店」の夫唱婦隨の反転に見えなくもない。其の結婚は奇しくも戒嚴令発動の丸1年前の 88年5月20日の事だが、本稿に於ける此の日付の因縁の意味は註63で述べた。猶、90年末2人は亡命先の米国で突如離婚を宣言し人々を驚かせた。譚璐美は『「天安門」10年の夢』(新潮社、99年)の終章・『「民主の女神」との10年』の中で、「以前からの性格の不一致と、逃亡後の新たな環境と将来への選択及び役割の転換に因って、両者は互いに異なる命であると実感した」云々の理由の裏の生臭い内情を覗かせたが、本稿の論旨に即して2点を指摘して置きたい。

第1、武田泰淳は中国人の叡智の根源を「数度の姦淫、数度の離縁」の歴史に帰着したが、彼等の受難と離縁も民族の宿命の象徴の如く映る。因みに、本稿筆者は毛・鄧の数度に亘る結婚歴を他の論考で取り上げた事が有るが、劉少奇の結婚歴も6回に上った(『消された国家主席・劉少奇』に詳述有り、78~86頁)。乱世から平時への転換を反映して、江沢民も胡錦濤も離婚歴が無い。

柴玲と封從徳は文科系と理科系の違い(柴は児童心理学が専攻で、封は北京大学遙感控制[遠隔感知・制御]研究所院生)も有り、亡命後の滞在先も片方が米国で片方が仏蘭西だったし、元より結婚3年目は夫婦の最初の危機と言われるので、別れ自体は別に不思議ではない。夫婦の絆は「異性相吸」(註33参照)の故に強固な一面も大きいですが、結婚には実生活の要素が多い以上、

境遇の変化や新しい可能性の出現等によって、選択や変更が出来ぬ血縁関係に比べて脆弱な場合も儘有る。儒教が夫婦の和合を大家族の円満の中核に据えたのは、個人主義の現代の核家族重視とは異・同の両面が有り、其の個我同士和合こそが至難の業と見做した所以であろう。

「夫妻本是同林鳥，大限臨頭各自飛」(夫婦は本来同じ林に棲む鳥で、命運の限りが来れば別々に飛んで行くものだ)，という身も蓋も無い諺は、此の事例でも証明された様に思える。漢語の「国家」は語源の『易経・繫辞』の「身安而国家可保也」(身の安泰，乃至国・家の安定が保てる)の通り、元より国・家の両面を合わせ持つ概念だが、国家の「鳥籠統治」(註50参照)も「同林鳥」の夫婦の契りの維持に通じよう。此の若い2人の「大限」は極限状況と解したいが、格言の中では寿命を含む命運の限界を指す。此の格言の宿命論的な色彩は、前半・後半の「同林・大限」の「宿・命」の意にも現われる。新文化運動と中共の揺り籠だった最高学府で育った学生領袖，民主化運動の急先鋒が離婚の理由に挙げた「環境・命」も、同じ「宿・命」に他ならない。「揺籃・鳥籠」に引っ掛けて言うなら、彼等や中国人は如何に揺れ動こうと、最終的には伝統観念の「鳥籠」の羈絆から脱し切れず、寧ろ其の母体に回帰して行く宿命を負っている。

譚は「異なる命」という、聞き慣れぬ言葉に引っ掛かった。/中国でも日本と同じ様に、20代の若者たちは語彙の不足によって、陳腐な表現しか“命”の重みを実感した彼等が作り出した、独特の言い回しなのだろうか。/後の事だが、此の漠然とした表現は、柴玲が好んで感覚的な言葉の1つだと、気が付いた。そして何時しか私は、彼女の意味する処を瞬時に理解し、深く納得する様になって行った。/彼女は“命”という言葉で、“浄化された魂”或いは“崇高で真実の願望”等と言う意味で使ったり、時には“繊細でいとおしい心の綾”等と捉えているのだ。」と述べた(187頁)。本稿筆者は著者の仕事と姿勢に感銘・教示を受ける処が多く、取り分け此の渾身の追跡報告に多大な興味を持ったが、此処だけ異和と不満を覚えた。

中共長老の後裔である著者は海外で活躍しながら、母語の中国語が自在に操れ中国的な発想への理解も深い。柴が米国で“take care”の心算で言った「請多保重」(ご自愛[静養]下さい)を奇異に感じ(195～196頁)、米国記録映画・『天安門』(95年、カーマ・ヒント監督)の英語題・《The Gate of Heavenly Peace》(天国の平和の門)を誤解と断じ、「天安門とは“天子が安泰であり、無事に天下を治める事を祈願する門”」で、故に天子が威光を示す此の聖域での学生の示威は不敬・反逆と捉えられるのだ、と看破した(232～234頁)処は、実に感心させられる。折角其だけ鋭敏な洞察を見せたのに、「命」云々への違和感が先行し伝統の求心力に留意しなかったのは些か残念だ。

本稿筆者は近年來の一連の指導者論の基軸に「命・名」を据え、統治の要諦を「理・礼・力・利」の4字に帰結したのも、中国人の心性や社会原理の究極の奥義が往々にして、単純そうな漢字に組み込まれている故である。『天安門』の中の戒厳令下(5月28日)の涙声に満ち泥酔状態に近い告白は柴にとって抹消したい物だと譚は推測した(232頁)が、其の不如意の根源は本稿の4諦図に当て嵌まれば「理・利」の欠如に帰せられる。逆に、離婚は声明で強調した通り、理性的な決断であり有利な選択であろう。本稿では新時代に於ける「理×利」の禳状の相乗を希望も込めて予言したが、振り返れば天安門事件の学生運動では、断食の実力行使や請願書の受理を求めべく人民大会堂の玄関に跪いて見せた演技の様に、反対の「力×礼」の組み合わせが見られた。

他方、事件の最中「(民衆を目覚めさせる)流血を期待するが、私は逃げる」と外国人に語った事が、95年4月下旬に台湾・米国で報じられ、柴の形象が打撃を受け「利己的」と見られた。本人は抗議し譚も『天安門』の強引な編集を指摘した(230～232頁)が、譚が柴に随って行けず

到頭袂^{たもと わか}を分ったのは、他ならぬ柴の公私両面の自己本位の所為^{せゐ}なので、其だけに柴が言う「命」に対する譚の解し方は甘い感じがする。柴の児童心理研究を志した過去を考えても、上記の純粋な意味は一面では真実だろうが、影の部分^{かげ}が果たして無いのか疑問である。其処で譚の女性らしい優しさが先ず思い当たるが、『天安門』の監督も女性だから何とも言えない。

其の監督の手法及び柴の件^{くだり}の発言の重要性に疑念を呈しつつ、譚は次の批判と自嘲を吐露した。「支離滅裂とも表現できそうなテープから、几帳面にもたった一言を掬い上げて、センセーションを巻き起こす歴史映画に仕立て上げるのは、余程^{よほど}の力量と執念が要る。して見ると、私は逆に、ジャーナリストとしての素養はまるで無さそうだ。」(232頁) 歴史の再現・操作の問題は本稿の範囲を超えているが、論旨に即して言えば、孫文と同じ広東人の鋭さ・純真さの同居を感じずにはいられない。『「徳治・儒商」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(3)』の註139で、広東料理の淡泊と山東料理の濃厚を2地域の人間の気質に関連付けたが、譚と柴の断層は広東と山東(柴は山東日照県の人)の「文化溝^{カルチャー・ギャップ}」と重ねれば興味深い。

柴玲の流血期待論が暴露された後は中国人社会で非難が殺到し、過激派の彼女さえ居なければ天安門事件は起きなかったのではという声まで上がった(230頁)。江青さえ居なければ「文革」は起きなかったろう、と言う類いの怨嗟と同様に無意味であるが、『天安門』の女性映画監督に絡めて言えば、改めて共産党中国の歴史に於ける山東女性の活躍が再認識させられる。67年8月5日の劉少奇夫妻吊るし上げ大会(註60)では、「4人組」の黒幕・康生の妻・曹軼欧が「中央文革小組」特派員の身分で、記録映画の撮影を指揮した(『消された国家主席・劉少奇』,70頁)。秘密情報・意識形態工作^{イデオロギー}の総締め・康と同じ山東閩の江青と曹軼欧は、三流女優と素人監督の奇妙な組み合わせを成した。其の日は毛の「私の壁新聞」の執筆1周年と正式公表の日だったが、毛が「文革」初期「全国初のマルクス・レーニン主義の壁新聞」と讃えた「爆弾」は、曹の画策で柴玲の母校・北京大学から飛び出た物(執筆者は哲学学部女性講師・聶元梓)だ(『毛沢東秘録』上,124頁)。

其は其として、柴の流血期待論は再編集の産物にせよ、重要な価値は否めない。失望の末に柴との訣別を決意した譚は、天安門事件は貴女にとって何だったのかと訊き、神から与えられた役割を果たしたまでだと言う返答に啞然とした(257頁)。指導者の「歴史責任感」と「演変」(移行)に絡んで後の論考に譲るが、両者が噛み合わぬ此の一件には本土の中国人と海外の華人との波長やチャンネルのずれを感じた。チャンネルを表わす中国語の「頻道」は字面に、「頻繁に道」「頻繁に使う道」を連想させる。曾て曲亭馬琴が使った「常言」(好く言う。熟語)が日本語から消えた事を、本稿筆者は日・中の「文化溝^{カルチャー・ギャップ}」の拡大の事例として、老子の「常道」(恒常の真理)と絡めて、前篇系列論考(『「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(1~2)』)で取り上げたが、「常言・常道・頻道」の常時接続をして置かないと土地鑑・歴史勘・文化勘が鈍く成りかねない事を、同じ海外に身を置く本稿筆者も自戒しなければ行けない。更に、母国への眷恋や「情結」(愛憎が混じり合った感情の葛藤。コンプレックス。拘り)が微妙に鼻根を誘発し易い危険も、中国の諸相と向き合う際に自覚する必要がある。

次に軍医の両親を持ち16歳で全国最優秀学生2百名の1員に選ばれ、北京大学心理学部 北京師範大学大学院心理学部の超英才コースを辿り、北大学生自治会と北京学生運動領袖を務めた柴玲は、プリンストン大修士課程卒業後ボストンのコンサルティング会社に就職し、ハーバード大ビジネススクールでMBAを取得した。亡命後の進路は時流を抜け目無く掴む彼女の機敏さと共に、新しい世代の選好と新しい潮流を映し出す。ハーバード大の卒業式の 98年6月4日が天安

門事件9周年に当たるといふ奇妙な符合を譚は指摘した（174頁）が、89—98の反転は本稿の「理治」「治理」の表裏一体にも吻合する。「文革」勃発の66年に生まれた柴が、23歳誕生日の89年4月15日の胡耀邦急逝が契機で、一躍に政治の中心に踊り出たのも不思議な因縁である。歴史の連環に即して考えれば、日本留学組で経済専門の李大釗（註30参照）が創始者の1人と成った中共は、李の死後75年後の今は清華大学等の理工科出身者が最高指導部を固める様に至り、同じ日本留学組（中央大学法学科在籍）の陳望道が日本語版から最初に全訳した『共産党宣言』（注8参照）の文言が党規約から蒸発したが、更に4半世紀後の建党百周年には恐らく、米国学組の経済・経営専門家が頂点に入っているだろう。此の「順時針」移行に就いて後に改めて予測するが、Harvardの中国語訳「哈佛」の「笑む佛」の形象と、ノーベル平和賞にノミネートされた柴玲が其の「佛門」を潜った事、そして「天国の平和の門」に絡んで言えば、経済志向の実用主義は政治の仁慈化と共に新世紀の平和への近道に成ろう。猶、微笑ましい「哈佛」は中国流の意味深の音訳の傑作に数えられるが、其の発想の深層から滲み出る米国への好感は、中国の近代化モデルの移行を取り上げる別論考（註4、30参照）の裏付けに成る。

元に戻るが、王震も流石に李鋭を裁く術が無く「空砲」の発射に止まったが、鄧小平時代の末期が毛の晩年と一部だぶった事の証として、天安門事件後に作家・鄭義が指名手配を受けた事が思い当たる。公安部89年第100号全国指名手配命令（9月1日）では、山西省文聯（文芸家連合会）映画界協会副主席・鄭義は動乱期間に重大な罪を犯したとのみ記し、罪名の欠落は其の時代の法治の不備を思わせた。長い潜伏逃亡の末に国内脱出（92年3月に香港到着、翌年1月に渡米）を果たした鄭は、毛の恐怖政治の事象と本質を冷徹に暴く『紅色記念碑』（台湾・華視文化公司、93年）等で、「中国のソルジェニーツィン」の印象を強めたが、紅衛兵の発祥地・清華大学付属中学の「文革」初期の学生領袖の1人だった彼に対する危惧は、当局の洞察と言うべきであろう。

彼は『歴史的一部分 永遠寄不出的十一封信』（台湾・万象圖書股份有限公司、93年）の中で、天安門事件の中の戴晴の消極的な態度を貶した（50頁。藤井省三監訳、加藤三由紀・櫻庭ゆみ子訳『中国の地の底で』朝日新聞社、93年）は、残念ながら原書の半分弱を落とした抄訳で、渦中の人間模様を記した此の1通目の手紙も丸っ切り抜けているが、戴晴も89年7月14日～90年5月9日の投獄が示す様に当局に睨まれていた。『長江！長江！』（註40参照）の発禁処分（大陸版の直後に香港三聯書店から『長江三峡工程応否興建 学者論争文集』の題で刊行。大陸版発禁後92年に台湾の新地社から『長江 長江 三峡工程論争』の題で刊行）と共に、王実味事件に対する彼女の追究を觀ても、忌み嫌われた理由は好く解る。賀龍の責任に踏み込んだ上で其の「文革」の冤罪と獄死を因果報応の如く捉えた例証と冷笑は、中共の開国世代の神経に触る刺激が強過ぎた。

『王実味和 野百合花』が上海『文匯月刊』88年5月号に発表された事は、振り返れば二重の示唆を持つ。鄧小平が経済運営の穩健派の慎重論を一蹴して、物価の構造改革の難関への強行突破を言い出したのも同じ月の事（註56参照）だから、其の暴露は政治・経済の「失控」（制御不能）に直面させられた為政者の緊張と焦燥を思わせる。一方、上海在任中に『世界經濟導報』を封殺した江沢民の時代の作家の安泰が浮き彫りに成り、軍から籍を抜いた白樺が上海作家協会に避難の場を見つけた事（註66参照）と合わせて、「北巖南寛」の構図も見えて来る。

戴は取り調べの為の拘禁を1年近く強いられたが、当局は謀らずも文筆家の貴重な素材と成る受難体験を提供し、彼女の声価を高める「箔」を付けた。其の秦城監獄は江青の収監場所（夏剛『現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熟読」』（2）』註74参照）だから、大

物でなければ元々体験できない。尤も、香港『明報』に寄稿した獄中手記（日本語訳は田畑佐和子に由る『私の入獄』、『中国研究月報』90年5月号）は、法治時代への移行初期の制裁側と被制裁側の攻防や内面を覗かせた貴重な記録だが、92年初めの経済専念への本格的な移行の結果、政治・思想の是非乃至領域自体までが人々の関心を失った。方励之の海外追放に由る天安門事件後の火種除きやガス抜きと共に、鄧の南巡は一層の「転移視線（注目・関心を逸らすこと）を促した。

本稿が続篇では建国来の53年を4等分に、13年強を1単位に党・国の「順時針」移行を論考する予定だが、戴晴の入獄から恰度13年後の02年の同じ7月の24日、鄧小平時代に女優から実業家に転身した劉曉慶が逮捕された。「儒商 徳治」の昇華を象徴する事として後述に譲るが、大物にも関わらず大方の予想に反して秦城監獄以外の処に入れられた事も、容疑の脱税と同じく脱政治の時代精神を物語っている。

尤も、戴晴の疑獄は思想犯なので両者は同日に論じ難い。譚璐美『「天安門」10年の夢』にも、天安門事件の最中の彼女に関する興味深い逸話がある。方励之と共に鄧小平の意志で除名された記録文学作家・劉賓雁は、政府と学生のパイプ役を務めた彼女を「彼奴は特務だ」と陰口を叩き、知識人の間でも彼女は国家安全部の為に働いていると言う噂が笑しやかに流れていた（70頁）。「文人相軽」（文人は相軽んじる）や「同行是冤家」（同業者は敵）の常識や、有名人を利用する中共の情報戦の伝統を思い起せば、其ほど不思議な非難や風説とも思えない。上村幸治は中国語文献と本人への取材に基づいて、軍総参謀部情報機関の命で中国作家協会に潜伏した戴の過去に言及した（『中国 権力核心』、文芸春秋、00年、239頁）。

戴晴の投獄は皮肉にも間諜の容疑を打ち消す結果と成ったが、趙紫陽の懐刀・鮑彤（中央委員、中央政治局常務委員会秘書、党中央政治体系改革研究室主任、国家経済体系改革委員会副主任）の刑罰（武力鎮圧の直前に拘束、92年1月に機密漏洩罪で党籍剥奪、懲役7年に処され）の様に、政争絡みの監禁も有り得る。斯くして中国政治の奇奇怪怪は、戴晴の「背景複雑」と同じく断言して能い。葉劍英の養女であるだけに、彼女の脱党は党の信認危機の深刻さを窺わせる。猶、戴晴は毛遠新と同じハルビン軍事工程学院の出身で、戦略導弾の開発・製造にも携わる第7機械工業部（宇宙航空工業省）に勤務した経歴も有り、本稿筆者は中国脅威論に関する系列論考で、葉劍英や「第2砲兵」（戦略導弾部隊）に絡んで触れる予定だ。本稿筆者は劉賓雁を尊敬する一方、『河殤』の作者・蘇曉康と同様に戴晴に好意的な観方を持つ（蘇の態度は同上70頁参照）。「夫妻本是同林鳥」に即して思えば、「同行」（同業）と「同行」（同行）の音異・意通が興味を引く。中共は好く準同志の盟友を「同路人」（同じ路を歩む人）と呼ぶが、「路」の「足+各」の字形は、「大路朝天，各走半边」（大道は天に向かって、行人は各々左右両側を行く。人生の道は開かれており、各自が我が道を行く）の原理を示唆する。天安門事件の際の知識人集団も結局「一盤散沙」に過ぎなかったが、劉賓雁と戴晴を同時に評価する本稿筆者の複眼の様に、友の敵も友と成り得るのである。翻って、鄭義が戴晴の消極性に不満を覚えたのは、王実味冤罪の暴露との落差が要因なので、毛沢東時代の暗部に対する戴の告発はやはり「寸鉄殺人」の力が有った。彼女は鄭と学生運動の一気に10歩も跳ぼうとする性急さを指摘したが、急進の頓挫を觀れば一面では当たっている。

天安門事件1周年の90年6月4日を前後に、戴晴が釈放され方励之夫妻の国外追放（註30参照）が許可された。方励之は「文革」中の68年に1年ほど拘禁されたが、同じ年に投獄された柏楊の大陸訪問は、前の88年10月に実現したので、やはり台湾の民主化は一步先行したと言えよ

う。尤も、「文革」後に方の党籍が復活した 79年に、鄧の「北京の春」への抑制以上の鎮圧として、蔣経国政権が美麗島事件で作家を含む数十名の反体制活動家を投獄したから、海峡兩岸は分断後やはり五十歩百歩の時期が長かった。張学良が 90年6月1日に漸く晴れて名誉回復に成った事（註59参照）は、此处では別の意味を持って来る。柴玲・封從徳の關係の清算も同じ年の暮れ（米国の中国系新聞『世界日報』に離婚宣言を発表したのは12月30日の事）なので、東欧共産圏崩壊・冷戦終結の翌年の 90年は、1月11日の北京戒嚴令解除を始め、中国でも過去の清算と未来への再出発の節目と成った様だ。意味深長な事に、方励之夫妻の出国が公表された6月25日は、江沢民時代が2年目に入った時点に当る（江の総書記就任は前年の6月24日）。因みに、其の日は朝鮮戦争勃発40周年でもあったが、方夫妻が米軍機で英国に赴いた事は、曾ての敵土士の歩み寄り時代の「平和演変」（平和的な変容）の象徴と言える。

江沢民時代に一部の著名政治犯の海外追放と汚職高官の厳罰は、生活面の腐敗や政治面の専制への批判で王実味、胡風が肅清に遭った毛の時代と対極を成す。王の筆禍作の『三八節有感』の3・8国際婦人デーは、巡り巡って建国後初の戒嚴令発動の日でもある。王の享年とほぼ同じ41年経ち其の処刑と同じ3月に、胡錦濤が西藏の長官として「暴乱平定」の最前線に立ったが、彼の時代に於ける思想・言論の自由度は、其の特異な経歴が有るだけに中共の「政治文明」の試金石に成ろう。「順時針」の垂直軸では胡の時代は毛の時代に向かって行く様だが、螺旋状の上昇の故に立体的に大きな開きが有り、時計の逆行はもはや不可能と観て能い。

平面座標系で近付いて来た毛の時代を見詰め直すと、反体制知識人に対する生き埋めや暗殺が無い点では、確かに秦始皇や蔣氏父子よりましである。註34で取り上げた魯迅の『柔石を悼む』は、蔣介石政権が 31年2月7日に上海で中国左翼作家連盟の文学者5人を秘密裏に処刑した事に触発された詩作だ。同日に処刑された18人の中共活動家の中に、林彪（本名・林育容）の実弟・林育南も含まれた事は、国・共政権の初代指導者の不倶戴天の關係の証だ。46年7月11、15日、野党・民主同盟の中央委員 李公朴・聞一多が相繼いで国民党の特務に暗殺された。41年後の同じ7月15日の台湾戒嚴令解除は蔣経国の英断に違い無いが、周恩来を慟哭させ学者・詩人の聞一多への暗殺は「蔣家王朝」の大きな汚点だ。翻って、胡風に政治的な死刑を下し廢人同然の発狂に追い込ませ、老舎を自殺に追い遣った迫害は、五十歩百歩の同罪である。張春橋は「新文史館」を造って巴金を収容して遣ろうとも言ったが、巴金が見抜いた通り優遇を装う生き埋めに他ならない（巴金『第二次解放』、77年。『講真話的書』、16頁）。巴金は「文革」中ツルゲーネフの作品の翻訳が許されたが、刊行の禁止は彼が言う様に刀を使わぬ殺し屋の仕業だ（同上）。

猶、『広辞苑』の「胡風」の項は建国後の事蹟に就いて、「53年に批判されて失脚」と記したが、55年の投獄に触れぬ処は核心を衝いていない。「文化大革命後、名誉回復」は其の通りだが、80年の部分的な名誉回復を経て死後3年目の 88年に漸く完全な名誉回復に至ったのは、王実味の事例と同じく体制の自省の困難さ、及び歴史清算の轉換期を示唆する。

- 74) 94年4月1日朝、安徽に近い浙江省内の千鳥湖で行方不明と成った小型観光船「海瑞号」が目付かり、台湾の黄山・三峡観光団一行24人と現地の船員・ガイド合計32人が焼死体で発見された。大陸側は当初嚴重な情報管制を敷き火災事故として処理しようとしたが、やがて強盗殺人・放火の事実が判明し、李鵬総理が哀悼の意を表す破目になった。6月19日に犯人として処刑された3人の若者は、モーターボート遊覧の経営不振で一攫千金の冒険に走ったと言うが、「先富」風潮の陰影と危険を浮き彫りにした事件である。

李登輝は事件及び初期対応に憤慨し、大陸を「土匪」(匪賊)と罵倒した。大陸が台湾に対して「匪」の蔑称を止めた後だけに屈辱的だが、「文革」の「無法無天」とは別の物騒な現状を考えると反省せざるを得ない。何しろ「政治風波平定」後の大陸では、政治と無関係で且つ政治の安定を脅かす犯罪事件の続発が目に見えた。李の「土匪」論に「砲弾」(支援材料の譬え)を立て続け提供するかの如く、96年2月に全人代副委員長・李沛瑶(63歳)が北京の自宅で金品物色中の若い警備員に殺され、8月に小説家・戴厚英(58歳)も上海の自宅で、金品及び同居人の若い女性を狙った郷里(安徽)の若い男に惨殺された。李克農と同じ享年(註73参照)で逝った李沛瑶の父親・李濟深は、蒋介石の参謀総長を務めた後に蔣に監禁され、33年で反蔣の中華共和国人民革命政府を創り自ら主席と成り、48年に国民党革命委員会を結成し党首を務め、共産党政権の初代中央人民政府副主席にもなった(6人の副主席の中で、朱徳・劉少奇・宋慶齡に次ぐ4番目。以下は張瀾・高崗〔註5参照〕)。李沛瑶の全人代副委員長と民革中央主席は父親の衣鉢を継承した物だが、建国後純刑事犯罪で命を落とした最高位の要人が選りに選って、中共の対台湾「統一戦線」工作の重要な組織の長であり、而も下手人は警備担当者だったとは、此の上無い強烈な皮肉と打撃としか言い様が無い。王実味の「実」と「味」の「口」偏に引っ掛けて言うと、正に敵に口実を与えた失態であるが、王が中共を敵に回したのは元を糾せば、暗部の告発が国民党に利用された所為でもある。一方の戴厚英は、長篇・『人啊!人』(80年。日本語版=大石智良訳『ああ、人間よ』、サイマル出版会、88年)で毛沢東時代の暗黒を暴露し、其の人道主義によってマルクス主義を超克する志向は、3年後の「精神汚染清除」の標的と成った。彼女が『詩人之死』(82年)で思んだ詩人・聞捷は、「文革」中2人の恋愛を許さぬ党組織に抗議し自殺した(71年、享年47)が、彼女は皮肉にも政治と最も無縁の相手や動機に由って命を失った。首をほぼ切り落とした程の犯行は、「土匪」の「土」の野蛮の含みを端的に体現した。

但し、大陸の治安悪化を攻撃する台湾も弱みを抱えている。大陸で『人間よ、人間!』が刊行された80年、美麗島事件(註73参照)公判開始の直前の2月28日、当局は起訴された無党派勢力の指導者、省議員・林義雄(38歳)の自宅を監視下に置いたにも拘らず、強盗の侵入と其の母親と双生児の娘(5歳)の3人に対する惨殺(長女も重態)を許してしまった。国民党軍が住民を弾圧した2・28事件の33周年に当る時期も、林が反乱罪で12年前の柏楊と同じ12年懲役に処された結果も、時代の推移の中の不易を感じさせる。李登輝時代でも千鳥湖事件の2年後の97年4月14日に、著名歌手・白氷氷と元夫・戯画作家の梶原一騎の間の独り娘・白曉燕(17歳)が誘拐され、犯人が5百万ドルの身代金を要求した上で凌辱・殺害をした。「副総統」・連戦が初の改憲に合わせて行政院長の辞任で引責した事は、李沛瑶事件後の武装警察指導部の更迭以上の良心を感じさせるが、犯罪集団の野放図に非力だった点は結局五十歩百歩だ。因みに、98年7月に台湾の女性市議員が大連で誘拐・殺害された事で、悪い方向でより先行の「百歩」が大陸の方に回ったが、今後の番付けは予断できない。

李登輝は抗議として観光・投資・商談を含む大陸との交流の凍結を決定したが、間もなく再開と成った展開は、陳水扁時代の大陸への高科学技術産業の投資・移転の解禁と同じく、「理・礼」で勝っても「力」に怯え「利」の誘惑に負ける台湾の姿、及び4諦図の右半球の強味を思わせた。『産経新聞』03年1月26日の上海発報告(『点撃上海 国有企業に「洗練」無し デパート店員は昼寝/予約意味無いレストラン/味、価格は安定』)で、記者はレストランの奉仕の悪さを酷評しながら、悔しい事に料理は全て美味しかったと付け加えたが、全国最大の国立森林公園に指定され観光の黄金資源と言われる千鳥湖一帯、及び大陸全体も左様な魔力を持つ。

共産党中国の4世代指導者の「順時針演変（時計廻りの移行）」⁽¹⁾（夏）

猶、「土匪」は日本で「土着の匪賊」とも訳されたが、単に「匪賊」か「山賊」で好かろう。日本は湾岸戦争中に閣僚が国会答弁で中東関係国を「山賊」云々で表現し問題に成ったが、中国流の「匪」は外国の敵には使わない。其の意味では「土着」に符合するが、中国人の「内外有别」（内外に分別^{けしめ}がある）の感覚の現われと捉えたい。中共が蒋介石等を貶すのに使った「匪幫」の2字は、20世紀中国史の解明の手掛りに成るが、詳論は本稿の連載2回目に譲る。

- 75) 司馬遼太郎『儒教三千年』, 215頁。
- 76) ウィリー・ラム（林和正）著、相馬勝訳『新皇帝・胡錦濤の正体 中国第4世代指導者の素顔と野心』（日本語版が原書）、小学館、02年、186～194頁。猶、胡錦濤を中国のプーチン大統領としたのは、『ニューヨーク・タイムズ』コラムニストのウィリアム・サフィアの論断（186頁）。
- 77) 趙紫陽と「新権威主義」の相関に対する検証は、本稿の主旨と筆者の守備範囲を超えているが、其の改革と連動した87～88年の「新権威主義」を巡る論争は、中国に於ける独裁開発の可能性と問題点を提示した意味でも興味深い。日本では余り詳解が見当たらないが、加々美光行編、村田雄二郎監訳『天安門の渦潮』（岩波書店、89年、75～78頁）に概略の紹介があり、岡部達味・天児慧『原典中国現代史第2巻 政治（下）』、岩波書店、95年）に其の抜粋がある（240～241頁）。
- 「新権威主義」に対する鄧小平の見地を窺わせる文献として、『中央要有權威』（『鄧小平文選』第3巻、277～278頁）に注目したい。物価・給与の構造改革の原案報告に対する88年9月12日の此の談話で、中央は權威を持つべきだと彼は力説したが、通貨膨脹や人心不安への予感が根底に有ろう。
- 78) 毛は死去の9ヶ月前の75年11月に迫ったが、20日の政治局会議で陶淵明『桃花源記』の典故を持ち出した鄧の謝絶（『毛沢東秘録』上289頁等、文献多数）に就いて、他の論考で詳述したい。
- 79) 『答意大利記者奧琳埃娜・法拉奇問』（80年8月21、23日）、『鄧小平文選』第2巻、353頁。鋭い取材で有名な伊太利女性記者のオリアナ・ファナチとの丁々発々の攻防で、毛と「4人組」、自分に歴史的な評価を下した彼の答えは、世界と後世の評価を重んじる国民性を反映して流石に見事だ。76歳誕生日の8月22日を挟んだ時機も気合いの入れ様を窺わせるが、本稿筆者は彼の類似談話の中の白眉として、此の長い会見記を本学国際関係学科の中国語文献講読科目の教材の一部に指定して来た。
- 80) 『読売新聞』03年11月4日記事・『李登輝氏の残像消したい？ 連戦・国民党主席 「親日姿勢」を批判』。
- 81) 戴国輝×王作栄対談、陳鵬仁訳『李登輝・その虚像と実像』（草風社、02年。原典＝『愛憎李登輝』、01年）等、李登輝の二面性を論じる言説が多い。元中央委員・許家屯（59年に全国最年少の43歳で省〔江蘇〕党委員会書記に就任し、第1書記昇任後の77～83年に同省の工・農業生産を全国首位に導いた実力者。香港回収工作担当中に天安門事件後の新指導部への不満から、90年5月に米国へ脱出）は、江沢民は李登輝の老獪^{かな}に敵わぬと論評したが、李の経歴の複雑さを考えても頷ける。毛の時代で「歴史（経歴）複雑」が要警戒対象と成ったのは、一理有様な気がして来た。何れにせよ、李と江は興味深い一対と言える。中台対立が高まる中で彼等が密使（中共側は曾慶紅）を通じて接触していた事は、註73の「頻道」（チャンネル）の妙味を体現している。
- 82) 松下幸之助『優れた国民性を生かそう』（77年1月25日）、P H P総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集』第4巻、P H P研究所、91年、339～341頁。京都経済同友会新春臨時総会で行なわれた此の講演は、末席取締役の山下俊彦を社長に抜擢した人事の8日後の事だけに注目に値するが、「權威が必要」「派閥がある方が効率が好い」「神こそ人間

だ」等の観点は、昨今の中国にも示唆的である。猶、其の頃の台湾の「総統」は嚴家淦（蔣経国）の「総統」就任は 78 年 3 月）であったが、松下が言った通り行政院長の蔣経国が「社長」に当る実権派なのだ。

- 83) 蒋介石の早年の極道組織構成員の経歴は、広く知れ渡っている故に多数の文献の引用は省く。1920 年前後に投機に従事した経歴に就いて、様々な説が飛び交って来たが、日本語文献を拾えば、楊逸舟著『蒋介石評伝・上巻 覇権への道』（共栄書房，79 年）の第 3 章・「蒋介石の粉飾された 10 年の境涯」(197 ~ 200 頁) に、小見出しの通り「投機師としての蒋介石」、「株屋で一攫千金」、「官職を買う為の百万元献金」、「上海での交友と国民党の投機性」等の暴露が有る。株の売買で巨富を掴んだ一幕は曾て秦瘦鷗著『蒋介石伝』に記され、対日戦勝後は同書から削除されたと言うが、蔣の醜聞の暴露に力を注いだ共産党側が此の件を余り突かないのは不思議だ。猶、生涯に亘って運勢・迷信に凝っていた蔣の性向と其の投機の経歴・嗜好との関連を著者は指摘したが、本稿の主旨に即して考えれば、占術の書・『易经』が中国思想の祖型中の祖型と成った事は、相場の乱高下並みに変幻し易い社会の激動や投機志向が強い国民性の証と思える。

共産党中国 4 代領導人之順時針式演变 (1) 以理、礼、力、利為軸心的中国政治之統治文化新論

本系列論文は《“ 儒商 - 德治 ” 之道：以理、礼、力、利為軸心的中国政治之統治文化 (1 ~ 3) 》(本刊第 14 卷 4 号 ~ 15 卷 2 号連載) の続篇。筆者在上部系列論文中、将中国傳統的統治理念概括為標題中の同音 4 字、並論述了其相互關係。在本系列論文中、通過考察、總結共産党政權 4 代領導人承前啓後、繼往開来的演变過程及規律、進一步揭示“ 4 要諦図 ” 的普遍原理及順時針式展開的形態。

在第 1 部分中、確認毛沢東時代的以“ 力 ” 為主 + 以“ 理 ” 為輔、鄧小平時代的以“ 利 ” 為主 + 以“ 力 ” 為輔、江沢民時代的以“ 礼 ” 為主 + 以“ 利 ” 為輔、予測胡錦濤時代的“ 双軌 ” 及重点將是以“ 理 ” 為主 + 以“ 礼 ” 為輔、並產生“ 理 × 利 ”、“ 礼 × 力 ” 等新組合。

從 16 大實現的平和接班反觀中共及共産党中国的歷史、並与同時代的蒋介石、蔣経国、李登輝、陳水扁政權作比較、指明国共兩党及台湾海峽兩岸的同根、同步、同軌、同倫性、從中發現中国政治的統治文化之影響及祖型。

(XIA, Gang 本学部教授)